

が、無慙や髪は手束の油氣のない島田である。けれど自然に生際麗しく、毛裕かなれば鬘かと思間違はれる位。洋燈を程よい所へ置いて、火を竝と捻上げた手を、直に髪へ戻して邪魔さうに遅毛を搔揚げ、

『此邊は町と違ッて冷やすから、風邪をひくと成りやせん。寐衣でも着さんせう。上げやせうし！』
念を押して傾げた顔の後氣ない中に、羞耻の色も見え、口説ありげな眼の汐、笑む時に少し眉を顰める癖も、何と無く自分を悚然と爲せる程の美しさで有った。

『ちや、氣の毒だが、貸して貰ひたい。』
『はい。』

何時の間にか立去ったのであるが、自分は恍然して或空想に耽ッて居たので、殆ど覺えは無かつた。もう來るか來るかと思ふと、氣が氣で無い。坐り直したり、寢轉んで見たり、溪流の音が不思議に他を嘲ける囁きのやうにも聞かれる。娘は切々來ぬので有る。
梯子を登る登音が爲る。サア來たと狼狽る途端、温袍を引抱へてぬッ顔を出したのは、丸々と肥った、十四五歳の少年で有る。

『是れ、お客様へ持つて行ッて來ッて、姉様が寄越しやしたぞ。』
『ふむ、然か。や、有難う。』

夢か

厚意は悦しいが、姿を見せて呉れぬので、甚く物足らぬ心地が爲た。

再び人の來る音が響く、今度こそはと我れ知らず微笑まれる。又しても失望！例の少年が茶盆に梨を添へて、『上がらんせう！』と素氣なく突出して去つて了つた。

此の分では今に膳が出て、給使の役も那の小僧奴が仰せつかつて罷出るに違ひない。はてな自分は唯可愛らし娘だと思つたわけの事で、別に氣振にも怪しい舉動などは見せない筈だが、婆奴は要らぬ邪推から、要鎖大事と堰くのでは無からうかとも思つた。言はば二夜泊りの旅舎、誰が給使に出ようと、先方の都合次第、此方は哀

願して泊めて貰つた安直なお客様、この小綺麗な室に通して呉れたのも、畢竟娘が特別な親切かも知れぬと獨慰さめても見る。が、何うも心が平かでない。他にお客でも有るか、其の方へ引付けられて居るのでは有るまいかと、譯も無く氣が揉めて、焦慮して、静座としては居られぬ。因で便所へ行く體で下へ降り、勝手の知れぬを假詫けに、彼方此方と彷徨き廻つて、下座敷の様子を窺つた。別に客は無いので一安堵。勝手の方は見通しなれど、娘の居處は悉目知れぬ。それが容易ならぬ失敗でも爲た程な失望で、悄然と手を洗つて元の二階へ立戻つた。暫時は室の中央に仰向に踏反臥つて、兩手を組で頸を犇と

夢か

抑へ、煙を搔廻す様な取留めのない妄想に耽つて、娘の心理解剖に向専念で居たので有る。不圖床側の棚に轉げて居る油紙包の荷物に眼が留まる、自分が目下の境界は駭然として、夢の破れた様に鮮明に復活ツた。女どころぢや無い、戀の色のと云ふ氣樂な身では無いのである。資財は無し、藝は無し、是れと云ふ力になる親戚も無いので、故郷に長く留まれば留まる程、前途に望みない境遇を、それ状に乾固めて了ふばかり、生涯他の侮蔑と願使とに甘んじて蠢々老朽ちる外はない。伸るか、反るか、奮發するは今だと氣が注ぎ、小學の履を辭して、遠縁の者の東京に居るのを便りとして、確な宛とても無く、踏

み出して來たので有る。この先何の様な辛い幾瀬の浮沈に遭ふのやら、其れを漕ぎ通して一廉の者に出世が遂げられるか、何うか、思へば今日の山道の難儀どころでは無い。捨小舟の拾乗に大海原へ漕出す様なもの、志は舵とも成らうが、帆は未か船楫さへ無いのなれば、何處を目的と指されるでも無い。高波の涯なき上は風任せに揺られ吹かれ流るゝばかり。却々以て戀などと云ふ贅澤な沙汰どころでは無いので有る。

愈々心で『自助論』のお復習が始まつた。此家の娘に對しても立派な人間になつて、故郷へ錦を輝耀かす身に成らねばならぬと、色々その工夫に肝膽を砕いて、自分だ

夢か
けの名案雲の如く湧き舉がって、大きに得意に成って居る。忽ち又梯子の発音、急速に躍起きて、周章爲て、角を前に座蒲團へ居直った圖は、他が見たら失笑したでもあらう。

静に入ッて来たのは例の娘で有る。

『お一人で何程か寂寞くて居なさいやせうし。』

『否。別に寂しいことも無いが……。』

『然？何時も馬車屋達が泊まりやすと、下座敷で各自に笛だの、尺八だの吹きやす。それに馬方唄や追分を上手に歌はさる人も来やすから、賑かで御座りやすけど、今日は生憎誰も宿泊が御座いせんで……。』

『ふむ、然ですかい。』と微笑した。娘の思遣りは悦しいけれど、實は那樣騒々しい手合に泊まられては溜らぬ。

『お飯が大變に遅れやして、空腹く成りやして、御座いやせう。』

『何。空腹と云ふ程でも無いよ。』

實は大空腹で、膳の出るのを待ちかねて居たので有る。彼は二度目には飯鉢を抱へて上がって来、少し洋燈の光を避け、斜に坐ッて給仕を爲る。地織木綿の紺絞染の浴衣を着て居るが、襟の劃然と水際立つて麗しいのに、能く對照ッて居る。自分には四五杯立續けに搔込んで、茶と云ふことに成ッて、良餘裕を得てから、談し始めた。先

づ福島までの道程、山坂の難易、この山中に住んでも、馴れたら結句世間が蒼蠅くなくって好からう、秋は木の實の種々なのが穫られて樂しからうと云ふ様な娘の答へよい話題を持ちかけたので、彼もそれ相應に調子を合せらる。旋て逆襲の状で、

「お前様は何處で御座りやすす？」
面羞氣な眼を此方へ向けた。

「私かい。」

「は。」益を體裁惡さうに側へ引いて俯向いた。

「私は新庄の者さ。」

娘は莞爾と笑つて、

「眞實で御座りやすか。」

何故に疑ふのであらうと、不審で娘の顔を見ようと爲たが、油氣の無い島田ばかり見せられた。

「眞實なんだよ。」

「己が阿母も新庄の者で、今は彼方に居やす。」

此の度は沈着いて顔を正面に向けた。其の眼に何者かを可懐と見る光が浮んだ。

「ふむ、然かい。母親と離れて居るんだね。」

「はい。」伏眼に成つて、些と萎縮れた聲。

「何う爲て、一所には居ないのかい。」

娘は急に樽ぎ込んで、痛々しく水仕事に荒れた手を些と

夢か

隠すやうに膝に重ね、

『少し事情が御座りやすのし。』

一面識の自分が問ふべきでは無かつた。事情は知らぬが、何となく氣の毒な感じが爲たので、口を噤んで了つた。

唐突に『阿塚や！阿塚や！』と、下で婆の聲がする。

『はい！今行きやす。』

膳を持つて立上りながら、可懐し氣な眼で、自分の方を見て、

『緩々お休み爲んせう！』

(中)

婆に敷いて貰つた床の上に、硬い蒲團を被いで横に爲つて、眼を閉ぢて見たが、透枕の下を流れる様な溪流の音が耳に着いて、何うも睡られぬ。靜に聞いて居ると、其の響が自分の軀を乗せて流れ下るやうにも思はれるし、又折々風の具合にでも因るのか、遠く成つて、雨の音かとも疑はれる。途今方婆の呼んだので、聞き覺えた那の阿塚の面影が深く心に沁着いて、闇中にも顯然と見られる。何と云ふ仔細の有るでは無けれど、自分の記憶し得ぬ遠い々々以前に、世の常ならぬ親しい關係でも有つた者のやうにも思はれ、唯一面識の女とは信じられ無い程の、無類な熱情を以て幻影に見る彼の面影に對するので

夢か

有った。而して深く交際した譯では無けれど、彼が僅の言葉と短い間の態度とで頗る温和な柔順な情深い伶俐な質を證して餘りあるものと思つた。自分が將來もし相應の位置を得て妻を迎へる曉には、成らうことなら那の娘の様なのをと念じた。確に念じたので有る。那のやうなのを朝夕側に置いて苦樂を共に爲たらば、奈何に楽しい日が送られよう。そこで窃に新世帯の手順まで手廻しよくも概略腹案に及んだ。何も今更迂遠く説くまでも無い、實は阿塚を見て世に謂ふ一目の戀に落ちたので有る。微睡すると牛に追はれて山道の藪を潜り、林を抜けて逃げ廻つたり、斷崖から轉落ちたり爲る悪夢に微宵醒はれ、

東の白む頃満身に冷汗かいて眼は覺めた。暑氣にでも中つたのか、眩暈して腹痛烈しく、獨り腕いて居ると、阿塚は登音軽く枕邊へ歩み寄つて、

「お客様！もう六時に成りやしたぞ。支度は出來て居や

す。」

今朝早立の意で、前夜から頼んで置いたので。

「や、有難う！」と答へたが、自分の苦む様子を見て、阿塚も眉を顰め、

「何うか爲やしたか。」と自分の顔を覗き込む。

實は云々で急には立てさうにも無いと話した。

「それは眞實にお困りで御座いやせう。今何か藥を捜し

夢か
て来て上げやす。先ア緩々臥て癒すやうに爲なんせう。』
優しい言葉を掛けて呉れる其の忝けなさは身に沁々と感
じた。

旋て賣薬に微温湯添へて持つて来た。

『さ、是れを上がって見さんせう。腹痛みには好く利く
ので御座いやす。』

『色々お世話に成って済みませんな。や、是れは有難う。』
服薬して暫時静に臥て居る中も、若し此の病氣が延引い
たら、早速旅費を使耗らして、東京まで行着かれぬ様に
成りはせぬかと案じられる。けれど心の何處やらには、
眺向の煩ひで、縦令一日なりと彼に看病爲て貰へるが悦

いとこの考への彷彿は無いではなかつた。此方は懐中都合
で我儘も言へぬ所から、別に註文を爲たでは無かつたの
に、氣を利かして粥を煮てお茶は取置ききの漬物と掻鶏卵
に爲て呉れた。萬事痒い所へ手の届く親切。一人旅の心
細い所へ不意の煩ひ、並に爲て貰つてさへ、此方は一心
に依頼るべきが人情。それを間の好い妹か、結髪の従妹
でも爲て呉れさうな親切に、有難涙が遂翻れる。長年住
馴れた故郷でさへ、此の様な親切を受けた記憶は無いの
で有るから。

腹痛の方は追々薄らいで来たので、阿塚が心盡しの朝餐
を済まして、復横に成つた。併し頭痛は一向止まらぬ許

りか、吐瀉氣さへ催ふし、苦しき何とも言へぬ。で、我が慢を爲ても自然呻吟聲が唇を洩れ出る。枕邊に心配さうな眼光で、自分の顔を目成ッて居た阿塚は摺寄ッて、

『今上がツたお飯が障ツたのでは御座いやすまいか。』奈何にも氣の毒さうに窺込むので有る。

『何爲、決して那樣ことは無いがね、腹痛の方はもう樂に成つて了ツたが、唯何うも頭が碎れさうでね。』

『然で御座いやすか。ちや少し敲いて上げやせうか。』

『氣の毒だが、萬望些と願はれるなら……。』

『敲いて宜いなら、幾等でも敲いて上げやす。』

『それは何うも有難う!』
眞に感謝の情に堪へなかつたので有る。凡そ一時間半も一心に敲いたり、撫ツたり爲て呉れた。此の人の温かい手が觸れるばかりも自分に取ッて何の位、適切な効驗が有つたかは、精神療養法を解せぬ人に話した所が無駄である。

翌日病氣は癒ツたけれど、疲勞の故もあるか何分心持が快然せぬので、出發する勇氣は無い。もう一日休養する事に決めて、午前は臥轉んで携帶の書など折々讀んだが、一向身に泌みず。始終下に阿塚が何を爲て居るか、其れを窺きたい様な氣が爲たり、もう何か用に假託けて上が

夢か
 ツて来て呉れても宜さ相な時分だなど、愚にも附かぬ
 念に悶え暮した。兎もすると出世も何も要らぬ、那の阿
 塚の様なのを妻に爲て、斯う云ふ閑静な山中に平和に世
 を送られるなら、此の上の結構は有るまいとも思ひ、出
 京などは可厭に成つた氣のせぬでも無かつた。
 爾閉籠ツて退屈爲て居るよりもと、婆と阿塚との勸めに
 晝飯後茲より七八町の白瀧明神へ散步に出掛けることに
 成つた。案内者が阿塚と決まつたので實は行く氣にも成
 つたので有る。
 道は溪流に沿うた杣の足跡を僅な便りと爲て降だるので、
 岩陰を這ひ木の根を踏越える所などもあつて、却々樂で

夢か
 は無い。けれども面白い石の水を囁んで泡立つ岸を楡や
 山紫陽花の花の咲誇る木立原を潜つて、静に阿塚に導か
 れて居るのは、何と無く仙境に遊ぶ様な氣が爲た。三町
 程降ると道は樂になつて、平地を行くやうな所へ出たの
 で、阿塚は問ひもせぬのに自分の身の上話を始めたので
 有る。
 彼の父は木挽を職として、山小舎を彼方此方と渡行き、
 年中宅に居るのが稀で、留守居の祖母と母とは兎角氣性
 の合ぬ故か、四合とは折合はず、果ては祖母の憎みを受
 けて、居づらい様に爲向けられ、二三度出入の有つた後、
 父も竟には宥めかねたと見え、性の合はぬ者を一所に置

くは雙方に苦しい月日を送らせるばかり、娘は不便だけれど、蝮に咬まれた腕と思つて、断然と此の縁は切つて了へと、涙を飲んで離縁を爲たので有つた。可憐しい母とは仇同意な祖母様の手に育てられる身の、何で快い日が送られやせう。唯母様が戀しくて、暇さへあれば新庄の空を眺めて、泣いて居るので御座りやすと云ふ。世の中には不断にある奴で、他の者の口からなら、自分は左程動かされも爲なかつたので有らう。けれども、彼が一呼吸の調子にさへ胸蕪かす程情の昂まって居た自分是我知らず同情の涙を注いで、色々と慰めた。

『私も新庄の者だし、お前の母様とは何だか他人の様な

氣が爲ないのだが、今急には何うも詮様も無いけれど、私も何うか爲て、一人前の者に成つて、故郷へ歸れたら、充分骨を折つてお前が母様と一緒に居られる様に盡力爲て上げよう。無闇に心配を爲ちやア軀が堪らんから、先ア諦めて時節を待つ方が宜い。』

阿塚は頬を傳はる涙を抑へて、

『でも、お前様は何時新庄へ歸らしやるやら、宛にやア成りやせんし。』

些と甘え氣味な調子で、昵と自分の顔を見返した。

『爾さ……』少し狼狽した。『先ア何だね……三四年の内には屹度歸つて來る意だから。』

夢か

『出世を爲さるに行くと言つて居さつたもの。三四年で
歸るなんて、嘘で御座りやせう？』

信じ無いのは至當で、却々三四年で一廉の出世の出来様
筈の無いのは、自分も滿更心得て居ない譯でも無かつた。

『先ア極長くて、五六年経つたら大丈夫歸つて來られる。』

『五年六年の長い中には、己が生きて居られるだか、何
うだか……。』

又嘘啼げて泣くので有る。

『疑はれては詮様が無いけれども、決して嘘は吐かん。
案じすと待つてお居で。』

『そんなやア、屹度待つて居やすから！』

山は縦し移るとも、と言ひたげな確信の眼光で、自分の
眼を見詰めた。

斗出た岩山の角に一簇繁つて居る檜林を廻ると、耳近く
に鞆鞆と轟く響に驚かされて、對岸を見仰げる。奇巖絶

壁の頂より落ち下る瀧の白糸數十丈、亂れ纏れて、水煙
濛々と立置め、飛散る泡は千萬の珠を撒くかとはかり怪

まれるので有る。藍の色よりも濃き深碧の瀧壺には、湧
立ち躍狂ふ水の餘勢大渦を捲いて物凄く、宛然鱗蛇の腕

き廻る恐しき様で有る。

天を衝くかとはかり勢ひ鋭く、瀧の肩より直立の鉾形の
奇巖その數十二三程竝んで、倒に懸かる振よき松は、午

夢か

後の日光を帯びて茶褐色の巖の色と對照ひ、言葉には盡くせぬ壯巖幻怪の感を起こさせるのである。

二人は少時これに見惚れて恍然と佇立んで居た。阿塚は不圖自分の方に顔を向けて莞爾と笑み、絶壁の松を指さし、

「那樣可怖い處に、那樣優しい松が能く立ッて居られたもので御座いやすこと。」

「爾ね。餘程暢氣な性だと見える。ハツハ、併し那も縁で如彼ところへ種子を蒔いた風奴の惡戯で、松は何にも知らずに居るのかも知れない。」

「然で御座いやせうかね。」

「先ア御覽！那方の岩の凹處には、睦まし相に相生になッて居るのが有るぢやア無いか。」

「眞實に、情交の好さうに附着いて居やすこと！」

「那などは色々恐しい雨風にも揉れて來たのだらうが。」

那の峻しい岩面を自分等の居處と決めて、互に縫りあひ助けあッて、一寸も動くまいと爲て居る。堅い料簡が悦しいぢやア無いか。」

「然で御座りやす。でも彼方のは離々になッて、溪流を隔て、あれマア、招ぎ合ッて居るやうな形格を爲て、

嚙側へ行きた相に見えやす。けれども、風が氣儘に吹飛した種子の落ち所の悪いばかりで、一生別れ々々で枯れ

夢か

て了ふので御座いやせう。
太い吐息を吐いて、急に俯向いて了った。

「何か思出したと見えて、甚く鬱ぐちやア無いか。」

「否。然ちや御座いやせんけれど、茲へ幾度も來やしたが、這麼に身に泌々と悦しい様な、心細いやうな氣に成つたことは御座いやせん。己何うか爲やしたいか知りやせんし。」

「私も這麼愉快に感じた景色を今まで見た事は無いのだ。相生の松ちやア無いが、茲へこの儘生拔きに成つて了ひたいと思ふね。」

阿塚はさつと顔を赧然めて、彼方向いて、

「でも木になど成つては詰りやせんものし、悦しい事も悲しい事も判りやすめえもの。」

「寧ろの方が剩劬勞が無くつて、幾等結構だか知れや爲ない。」

(下)

旅費が乏いので、一日も無駄に逗留は爲れぬ。甚く名残は惜かつたけれど、翌朝早く旅装を整へた。阿塚は心を込めて鞋の爪頭を足の痛まぬ様にと石で敲いて呉れ、梅乾を入れた握飯を笥と袖へ忍ばして呉れ、行く先途の水の善悪まで懇に教へて呉れた。いよく訣別と爲つて、

歩か

自分は何か阿塚に心ばかりの禮を爲たく思つたが、金は至つて手薄し、貨物とても無し。因で不圖尾花澤の小山から引抜いて來た櫻苗のことに氣が着き、

「阿塚さん！色々お世話に成つて、何かお禮でもと思つたが、今は何うすることも出來ませんがね、……。」

「お世話どころか、眞に不愛想ばかり、濟まねえこんで御座いやす。」

「何もないから、此の櫻は、邪魔に成るか知らんが、私が態々尾花澤の山から背負て來たのだから、其所の庭へ後の紀念と云ふも可笑いが、花が咲いたら私がお禮を言つてるのだと思つて、眺めて下さい。」

「有難う御座いやす。幾本下さいやす？」

「要るだけ置いて行きますせう。」

「折角で御座いやすから、二本吳なはんせうし。我儘云つて濟みやせんけれど。」

「宜しい。私が植ゑて上げよう。何處でも好さ相な場所の指圖をお爲なさい。」

「否。一本はお前様が植ゑて呉なされると、外のは己が植ゑやす。」

「然か。」

「此所の前を通りなされる時に、お前様が宅を忘れ爲さらねえ様に、矢張出口の坪に植ゑて呉なはんせう。」

夢か

『奈何にも然か。』

自分は阿塚と共に櫻苗を適當な空地へ植着けた。阿塚は莞爾しながら、雙方を見比べ、

『彼方はお前様で、此方のは私。何方が早く伸やう？』

『何方が伸びるか分らんが、花の咲くのは彼方の方に限るさ。』

と阿塚のを指して微笑した。

『先ア……』と顔を背けて、『兩方ともに嵐に摧れねえ様に、氣を着けて育て、置きやす。花の咲く頃には屹度此方へ歸つて来て見て下さんせうし！何卒願ひやすぞ。』
『それを樂みに爲て歸つて來ます。』

名残は何時まで盡きぬので、やつと心を取直して訣別れたので有つた。

* * * * *

東京着の後六七年間は、色々苦しい變化多き境界を経たのだが、辛くも學業だけは餘暇の許す限りは續けた。因で辛抱効あつて、某商業學校を卒へ、さる手引で山際商會に聘され、兩三年間魂の盡く限り忠實に勤めたので、先づ獨身生活としては少々餘裕のある位地に迄昇ることを得た。書生時代には郊外へ散歩に出たり、心寂しく感ずる機などには、彼の板谷峠の白糸明神の景色と共に、阿塚が上を憶起すので有つた。職を得てより多忙に紛れ

夢か

て、何時の間にか忘れ果て、心に浮ぶことは悉無と成つて居た。

さる年の春の末、郷里の叔父が死去の訃音に、上京以來始めての歸省を爲たので有る。久しく忘れて居た彼の阿塚と約した事、其の當時の光景など、途々眼に見るやうに思浮べて、今頃は何う爲て居よう。子の三四人もある世話女房の面影が見ぬ中から思遣れて、些と妬ましい感も爲たので有る。いよく板谷の峠を向へ越す日となつて、今夜は阿塚が家に泊まり、昔語でも爲て、當時の禮も言はうと、俵を頻りに急がせた。確に彼方と目的を着けて眺め遣るに、道側の草原に二本の山櫻満枝崩るゝ

ばかり花を着けて、昔の美しき夢の跡是れのみか、と驚かれた。近所の百姓家二三軒を聽いて廻つたけれど、何處へ移住して何うして居るか、尋ぬる手掛りさへも得なかつた。

(明治三十七年十一月稿)

札くひ

札くひ

(上)

「叔母さんの仰しやるのも一理ですけれど、私は爾思ひますね、何を云つたつて、お金位依頼に成るものは外にやア有りませんからね。」と稍激込んだ調子で云つてゐるのは、年の頃三十五六の蛭谷の凹んだ、色の浅黒い、額に可厭な筋の蜿蜒を見せた丸顔の女だ。「それはお前、お金の大事なことは誰だつて知らない者は有りません。けれども、お前能く考へて御覽なねえ。幾等お金が大切だ

札くひ

からつて、些細な物惜みを爲ちやア、其の爲に幾度養子を貰つても、皆追出して丁ふなんて、那麽客な料簡で何う爲ます。末にやア一人者になつて誰も管ひ手が無ければ、お前お金有つたからつて、究らないぢやア無いか。」と五十七八歳の肥肉な老女が情ないと云ふ表情で諭して居る。「叔母さんは、始終私が吝嗇だからくくくと仰しやるけども、何も私が悪いからばかしく云ふんぢやア有りません。」「お前の料簡が悪いからだわね。来る養子も、来る養子も、居着いて居人が一人だつて有りやア爲ない。それと云ふも何か蕩樂でも爲て無駄なお金を使ふとか、妾が有つて其れに持出すとか、大酒食ひで詮様が無いと

札くひ
 か、乃至博奕が好だとか云ふのなら追出すのも至當だけ
 れど。」
 『那様の舞ひ込まれて溜りごとが有るもんです
 かよ。』
 『否、那様曰くの有るのなら、離縁も聞えて居
 ると云ふのさ。お前のは、マア何だい。お湯へ月五度も
 行かれるやうぢやア身上が續かないの、ヤレ此のお米の高
 いのに、那麽大食な人は置かれないうちや無いか。』
 『否
 ツて、世間様へお話も出来ないだらうぢや無いか。』
 『否
 ね、私が悪いか、善いか、其所は分りませんがね、結局
 私の不運だからです。来る奴も、来る奴も世帯氣の無い、
 錢使ひの荒い、飛でも無い不敏者ばかり舞込んですもの。』
 『お前のやうに、無闇に世帯氣に凝固まッて、食物も惜し

札くひ
 い着物も惜いちや、誰だッて辛抱の出来ッこは有りやア
 爲ないわね。儉約も好いさ。約る所で約るのは、其りや
 ア是非爾なくツちや成らないけれど、御亭主を乾干に爲
 て、ソレ働け、ソレ稼げと云ふんぢやア、お前、今時誰
 が満足な男が、居て呉れよう筈も無いぢやアないか。』
 『私
 だッても、那麽に何も酷い譯ぢやア有りませんやね。』
 『で
 も不斷、お前が爾云ッてたぢやア無いか。』
 『事實に據ッて
 詰られたので、阿崎もぐツと行究ッて了ッた。』
 叔母は熟々と阿崎の顔を眺めて、困ッた者だと心で呟く
 やうに、太い吐息を吹き、『今日の生活に困りでも爲るの
 なら、又其所にも其所が有ッて、些細な浪費が夫婦不和

札くひ
 の素になると云ふのも、世間に有中の事だから是非ない
 次第だとも諦めようが。お前の所なぞは、借家何軒、地
 面何町歩、それに貸金だつて、千や二千纏つたのが有る
 のだから、外に厄介者の有るぢやア無し夫婦二人位寝て
 居て暮したつて、溜るばかりだわね。何も那麽に強慾な
 因業な根性を出して、一人法師に成つて了はなくつても
 宜さ相なものだにねえ。』涙含んで烈しい語氣である。
 相手の阿崎は至極沈着いたもので。『叔母さん！其りやア
 可けませんやね。些とばかりし財産が有つたつて、結末の
 無い亭主の云ひなり法題に爲せて置かうもんなら、二三
 年が中に、元も子も粉塵いて了ふの、譯の無いこつて

さア。』『誰も養子の爲たい法題に爲せて置けなんて云つ
 てやア爲ないやね。究り餘り細い事に誇々云つて、吝嗇
 な事を爲るから居人が無いと言ふのです。』『ハツハ、
 那樣ことを云ふけれども、其りやア他の身上だから爾云
 へませうさ。私が以來氣前を見せますから萬望お金の二
 三百圓も頂戴なと云つたつて眞逆叔母さんがアイと云て
 下さるでも無いでせう。他の痛さなら十百年も堪へよう
 てンぢやア、實に困りますね。』『何ですつて？』と鋭く
 突込んだ。流石の叔母も憤としたらしかつた。『叔母さん
 ！怒ッちやア困りますわね。談話でさアね。何も下さい
 とお願い申すのぢや御座いません。』『誰が又不自由も爲

札くひ

札くひ
ない奴に矢鱈にお金を遣って溜るものですかよ。』『ですから、頂戴爲ようとは申しません。』『ふむ、其りやアお前、當然ぢやア無か。』『叔母さんは直に怫然爲さるから困って丁ふ。』『怒らなくツてさ、那樣勝手な事ばかり云ツて……。』『お怒ん爲すツたツても、詮様が無いぢや有りませんか。』『ハイ、もう何にも言ひますまい。』眼を閉ぢて俯向いて了ツた。

叔母は少し膝を側へ向換へ、情無さ相に、忌々しさうに、煙管の雁頭へ貰の尾を曳くも知らず、狂暴に填込んでスバリ／＼吸ツて、邪慳に火鉢の縁を續けさまに敲いた。

阿崎は敲かれる縁をジツと眺めて、寒心して『好い年を

爲て、世帯氣の無い人だ。他の物だと思ツて、壊れようが、破れようが、釜はない氣なんだよ。』と思つて、我知らず眉を擧めた。『ねえ叔母さん！』と阿崎は少し顔を其方へ向けて宥めるやうな調子で、又『ねえ叔母さん！』と呼び懸けたが、返事がない。其れにも拘らず獨言のやうに呟き始めた。『叔母さんは唯もう一圖に、私が物惜みを爲て口喧しく苦言を云ふからツて、お叱りになるけれども、私だツて洒落や酔狂に亭主を追出す程の物好も爲やア爲ません。眞實私や身代を思ふ程の男なら、女の私に出来る位な辛抱を、男に出来ない筈もないと思ひますねえ。それに養子にでも來ようと云ふ奴は、樂を爲て遊ん

で暮さう位の料簡が屹度下地に有るんですから、此方が
 些とでも手綱を緩めようもんなら、其れこそ最後、家の
 金を出して妾狂ひや藝妓買を爲て遣らうと云ふのは、
 見えて居まさア。それをも我慢爲ていすね、人を好く爲
 て見ない振か何かで済まして、迂闊恍として居ると爲ま
 せう？お結末にやア、借家や地面も名前改して、顛倒に
 此方へ一昨、お出を決めようと云ふのが當世なのです。
 叔母さんが何と仰しやツたツて、男に心を緩して、金を
 手放すような不要心な料簡にやア私の性分で以て、何う
 爲たツて出来ませんね。縦令他人様に因業だ、強慾だ、吝
 嗇だと侮されようが、罵されようが、那樣ことを彼是氣

に留めてたツて、詮様が有りませんからね。爾いふ立派
 なことを云ふ世間様が何うでせう。私が明日が日乞食に
 なつて、何うかお慈悲に一文遣ツて下さいと、云ツたツ
 て、鏝一文快く下さり相にも無いぢやア有りませんか。
 悪罵は先方持で、身始末は此方持ぢやア、迂闊と世間の
 云ふ事などを採用る、此方が好い面の皮でさアね。』息を
 も繼かず流暢に饒舌かけた。
 叔母は暫時は聴かぬ態で、横向になつて居たのであるが、
 忌々しい言條にも、折々至當な所もあるので、遂引着け
 られるとも無く、阿崎の方へ腫が引かれる。阿崎は一段
 と聲に力を入れ、

札くひ

『爾ぢや有りませんか。私の云ふのが間違つて居ようとは思ひませんね。』叔母へ肉薄すると云ふ語氣である。『實にね。お前は理窟の分明つた人だよ。私は今まで、其の位發明だとは思ひませんでしたよ。大きにね、意見がましい事なんか云つて、孔子様へ講釋を爲たやうなもんでしたよ、ね。物の道理の能くお分明なお前だから念の爲聞いて置きますが、此の先お前は、亭主は持たず、子は無しとなると、萬一病煩ひなぞの有つた時には何うする意だい。』半は嘲るやうに、半は姪が不便の心も無いではない。『病氣だつて、お金さへ有りやア、上等の看護婦が頼めますからね、那樣ことは御心配なすつて下さいませ

な。』『ふむ。然かい。』叔母の方が降参つた状。『それにねえ、叔母さん！金の威光でいものア有難いもんですね。三軒隣の、例の三里の隠居さんですね。那の通りの恐ろしい顔で以て、お負に昨年から中風に罹つて、半身不随で、大小便は垂流す、實に何うも鼻持がならない業病人でさア。それでも、死金が四五千圓あると云ふんで、難妓あがりの清ちやんに升さんが、實の親父よりかも大事に爲て、右左からソレ手を撫る、足を揉むと云ふんで、それはく深切を見せて居ますとさ。其れを思ふと、何う爲たつて、お金は粗末にやアなりませんやね。』『それはお前、深切と云やア深切かも知れないけれど、慾が爲

せゑる深切で、心底ぢやア早く死んで了やア好いと、思ッて居ようぢやアないか。『那樣ことは知れ切ッてまさアね。心で縦令何う思ッても、大事に爲てさへ貰へれば、私なんかは結構です。心なんかは焼いたッて煮たッて食べられる物ぢやアなし、何の役にも立ちやア爲ませんからね。』『ふむ。お前は其れで満足かい。』『ハイ、それで結構です。嘘なら御覽なさい、私が煩ひついたら、八方から、深切な看護人が大勢押駈けて、入口へ下足番を控へさせ無けアならないような、騒動が始まりませうさ。』
 『マア、氣の強いにも程がある、其れ程のお前なら、もう、私なんぞは、以後はお前に何も云やア爲ません。』

叔母も到底自分の力では意見どころか却て説破られる勢であるから、駄目だと諦め、養子を呼戻す肝腎の相談の本文へは入らず、端緒ほぐして捲收め、不興儲けで歸つたのである。

(下)

爪に火點す程な恐しい婦人と、世間の口の端にかゝる阿崎なれど、別に十呂盤球から生まれ出た譯でもなく、體に濃い血も通はうし、若い時には色戀に麗しい夢を見たことも有るのであらう。十二三歳の頃、両親に死別れ、頑固い一方の叔父が後見で成人り、十八九歳で或家から

札くひ

札くひ
 相應な養子を迎へ、親譲りの質店、帳場に端然と座を構へて嵩堆な帳面を控へ、亭主を手代とも丁稚とも追廻し、扱使ふ腕の凄さに、近所を驚かした程の氣丈者。其の後五六度も養子を取換へ入換へたのだが、何れも阿崎の嚴酷いと言語道斷な吝嗇家なのに辛抱爲きれず自分で出たのもあり、此方で離縁爲たのも有る。一人も居着く者の無いのも無理のない譯で、他にこそは知らせねど、毎日三度の食も安辨當屋と内約あつて、裏口から窃と餘飯を買取つて来る。薪は入らず、暇は潰れず、お負に往來で拾物も有らうと云ふ胸算用。湯には月三度と決めて、此の外は衛生に善いと唱へて、寒中も冷水浴の勵行であ

る。髪は年中自毀自剃で、芝居や寄席は風俗を亂すなどと小新聞の社説大賛成で、曾て覗いたことも無い。一事は萬事で、不斷の生活向の嚴酷さも大概これで推測される。茲で阿崎程の類例稀な婦人に就いて、何が彼を斯くまで冷酷な拜金宗の使徒たらしめた、深い因縁が有らうなど、穿鑿するのは無益である。性にも有らうし、種々の事情も有らう。が、併し蓼の苦き、通草の甘き、一莖草の因縁も、何が故に然るか、と尋ねて遠く溯れば、直ちに宇宙無極の心核に入らねばならぬ。
 阿崎の財産は追々肥太ツて行くに連れ、當人の體は日々に瘦衰へて行くので有つた。丁度三十八歳の秋の始から

札くひ

病つき、顔から手足まで可厭な色に腫んで、日頃の元氣も幾等か弱ッて、一月餘りはぶらく爲て居たが、賣薬位で済まして、相變らず十呂盤と帳面を側に引附け、勘定に日を暮して居たのである。我慢と不養生との果は愈々病勢つのるばかり、秋の半には立居も不自由になつて、有紫の剛情者も床に就いて了つた。漸と近所の醫者を迎へて診察をさせると、却々の重症ゆる油断ならぬとの事である。けれど當人の意では、『何有、那の藪醫者奴、薬料や診察料を多度取らう下心で、他を威かしやアがる。』と思ふので、榮養不良が第一の病因であるから牛乳何合、鶏卵幾個との注意をも他の錢は惜くないと思ッて勝手な

札くひ

贅澤を云ッてる、と餘所事扱ひで一向用ひぬ。常から友達や親類の交際を甚く嫌ふので、碌に出入る者とても無いので有ッたけれど、斯うなッては眞逆に近親の者は棄置かれぬから、世話して遣らうと訪ねて来る。と直に賄勘定が始まる始末だから、三日とは附添ふ者もない。因で、近所の貧乏人の子供を頼んで床の上から怒鳴つての指圖三昧。『ソレ何う爲たんだい。那樣に薪を矢鱈に燃す奴が有るか。だから、お前達は貧乏を爲るンだよ。』と叫ぶ。少し粥の餘りを決水槽に翻すと、『勿體ないちやア無いか、お前はお米の大事な事を知らないのかい。那樣料簡だから貧乏を爲るのだよ。能く氣をお注

札くひ

れくひ
 けー』と叱り飛ばし、『貧乏人の心がけは丁度宜く出来るものさね。』と憎々しく吐やくのである。
 曾ては『私が煩ッたら、上等の看護婦を大勢頼みますよ。』と云ッて居たのだが、愈々重病と決ッても看護婦のこともなどは噫にも出さぬ。眞逆爾でも無からうけれど、昨今の様子では、生命よりも金が惜いのだらうと、他の蔭口も満更打消し難い趣も見える。奈何に貧乏人の子でも、僅ばかりの賃銭で、口喧囂しい厄介至極な病人に矢鱈に追使はれるを快よく思ふ筈なければ、自然近所の長屋の娘供も、『那麼死損ひの業晒奴、来て呉れッたッて、誰が可厭なこッた、あかんべえだ。』と口を尖らして寄着く者

れくひ
 も悉皆になッた。
 斯う悲惨な境涯になッても入院する心も、看護婦を頼む氣もない。獨床の上に呻吟ながら、枕元に涼爐引附けて粥煮る様の淺ましき、目も當られぬ有様である。一旦愛想は盡しても、肉親の叔母だけに、阿直ばかりは、聞傳へて看病に来て呉たので、阿崎も『叔母さん！ マア能く来て下さいましたね。』と顔をジッとして見て有難涙をほろりと翻した。けれども、入院しろの、看護婦頼めの、某博士は名醫だとの評判だから見せては何うだのと云ふ。凡そ金が出る忠告には少しも耳を傾けぬ。『否、夫には及びません。』の一點張で皆撥斥て了ふ。それに可厭なことに

聞いては、涙の止途が無かつたのである。狼狽て駈つけ、枕近く膝行つて、

「崎ちやんや！お前はあのね〜」と幾度か言淀み、お医者様が云々仰しやつて居らつしやるのだから、滅多に那樣ことは有りも爲まい、とは思ふけれども、と前置して、

「若し萬一したことの有つた時にだね、跡に遺憾の無いやうに、お前の財産を何う爲やうとか云ふ、お前の料簡を聞いて置かなくつては悪いと思つてね。」

阿崎は恐しい瘦た顔に深く皺を寄せ、窪んで凄光のある眼に叔母の顔を見あげた。枕に身を支へる其の手の細

さ。

「何ですって？」

「お医者様の仰しやるには、到底可けないから、跡のとや何か、聞いて置くべき事は今の中聞くが宜からうと、爾仰しやるんだからね。言ッちやア悪いとも思ふけれど、斯う成つてから言はずに萬一の事があつては、尙惡いからね……………」

「ぢやア、もう私は死ぬんですかねえ？」

「それはね、崎ちやん、屹度死と云ふ譯は有りやア爲ないわね。お医者様がもう到底可けないからと、見放した病人で、癒ッてびん〜爲てるのも随分あるんだから、

札くひ

は、其所邊を掃除して遣らうと思つて、物置や押入などの戸でも開けようものなら、重い頭を擡げて、猜疑の眼を据ゑて物でも取られまいかと、心配さうに見張つて居る。要篋筒の側へなど行くと、顔の色を變へて、『其方は其の儘にそつと爲て置いて下さい。私が跡で宜いやうに爲ますから。』と恟々してゐる態である。斯うなつては、幾等不便と思つても叔母も世話効のないと腹も立つ、宅の方も忙しい、遂歸つては見るもの、全く棄ても置かれぬので、従妹供を交代に遣す。相變らずの猜疑、邪推、厭味、苦言で責立てられるので、誰も長くは附添うて居ては呉れぬ。親類縁者の馴々しく訪ねて來るのは、皆自

分が死んだら遺産の分配に與らうとの下心で、其の手蔓を抑へる爲に近寄るとのみ僻んで居るのである。其の舉動その言語で『あ、然か。』と覺つた者は二度と足踏をせぬやうなるのも自然。來なければ來ないで不人情だと罵る、手の附けやうも無い。

左右する中、十一月の下旬になつた。主治醫某は叔母の阿直に向ひ、『もう三日とは保ちますまいから云ふべき事や聞くべき事があるなら、其の意で早速爲さるが宜う御在ませう。』と警告を與へた。

幾等心柄の此の業病自業自得で此の悲惨な眼に遭ふのであるとは云ひ條、親身の姪の死期の最早兩三日の中だと

札くひ

聞いては、涙の止途が無かつたのである。狼狽て駈つけ、枕近く膝行ッて、

「崎ちやんや！お前はあのね〜」と幾度か言淀み、お医者様が云々仰しやつて居らつしやるのだから、滅多に那樣ことは有りも爲まい、とは思ふけれども、と前置して、

「若し萬一したことの有つた時にだね、跡に遺憾の無いやうに、お前の財産を何う爲やうとか云ふ、お前の料簡を聞いて置かなくッては悪いと思ッてね。」
阿崎は恐しい瘦た顔に深く皺を寄せ、窪んで凄光のある眼に叔母の顔を見あげた。枕に身を支へる其の手の細

さ。

「何ですッて？」

「お医者様の仰しやるには、到底可けないから、跡のこ
とや何か、聞いて置くべき事は今の中間くが宜からうと、爾仰しやるんだからね。言ッちやア悪いとも思ふけれど、斯う成ッてから言はずに萬一の事があッては、尙悪いか
らね……………」

「ぢやア、もう私は死ぬんですかねえ？」

「それはね、崎ちやん、屹度死と云ふ譯は有りやア爲な
いわね。お医者様がもう到底可けないからと、見放した
病人で、癒ッてびん〜爲てるのも随分あるんだから、

札くひ

那樣にね……。だけでも、先ア萬が一、若しもの事の有った時に、此身代を誰に遣りたいとか、誰々に是々を分けて遣つて呉とか、お前さんの望も有らうかと思つてね。真に言難いのだがね、言ずにやア置れませんか……。」

「何時死ぬんでせうね。」涙合んで俯向いた。

「宛にやアならないけれども、お醫者様の仰しやるには……もう二三日の中にとか、何とかね……。」

「ハア、爾？もう二三日中に私ア死んで了ひますかね。」

「何うだか、確な事は分らないけれども……。又那樣ことの有らう筈はないと思ふけれどもね、先づマア、お醫者様のお話ですから、言つて置くのですよ。」

阿崎は唯頷いて、黙して、頭を褥と枕に着け、すっぱり、夜着を被つて了つた。考へて居るのか、泣いて居るのか、油氣のない亂髪が顔へて居る。少時叔母も無言で此の不便の状を見るにつけ、嗚咽の聲洩すまいと爲ても押へ切れぬので有つた。旋て阿崎は静に夜着を押し除けて顔を擡げ、枕の下を探つて鍵袋を取出し、

「何卒ね叔母さん！其所の要筆筒の右の三番目を開けて、銀行の通帳を出して下さいなね。」

叔母は云ふが儘に通帳を出し遣ると、是れで貯金を残らす今日中に引出して来て貰たいとの依頼、病人の希望通り、叔母の阿直は俵で銀行へ駈つけ二千五百何十圓と云

ふ紙幣を引出して歸るや否、阿崎の枕頭へすらり竝べて見せた。當人至極満足の状態、細に金高を調べ、大束な札を窠れ果た掌に載せ、目を引いて見て、莞爾と笑つた時の凄かつたこと、叔母でさへ悚然と爲た。

『お前はマア、このお金を何うお爲の意なの。』

『何う爲たつても可いちや有りませんか。』

『それはもう、お前の物だから勝手だけれどもね。』

『私は今まで食べる物も碌に食べず、着たい物も着ず、丹精に丹精を重ねて、漸とこれだけ溜たんですもの、縦令死んで行くにしても、人手に渡したかア有りませんか。持ッて行かうかと思ッてね。』

『ふむ。爾かい。』叔母も呆れて返す言葉が無かつた。金を引出して来た翌日の夕方、叔母は已むを得ぬ用事の爲近所の老婆を附添ひに頼んで自分は鳥渡宅へ歸つた。その間と云つても、僅二時間程で有つたが、阿崎の部屋へ歸ッて見るともう死んで居たのである。爾も世に類のない死様であつた。百圓札幾位かを吃と口に含んで、残餘を左右の手に堅く握み、眼を開いた儘仰向さまに恐しい相貌で斃れて居るのであつた。併し彼の地面借家本宅貸金などの重なる財産は、彼と不斷極めて間の悪かつた叔父の丑藏が手に歸して了つた。否その口へ含んだのや手に握んだのも丑藏が物に成つたのである。

札くひ

叔父訴訟

破草鞋に結ぶ氷塊の音冴えて、疲るゝ足に踏む雪道遠く、水墨色の細流、音立てずゆく彼方に、村の燈火迢々なり。痛む腰を杖に支へて、顛へながら辿れば、水楊枯れて水門高き堤の上に出でぬ。六十餘年の昔、我が寺子屋通ひの道草に、笹舟浮べ、蟹穴探つたのも此邊であらうか。此の水の右に岐れてゆく彼の杉木立は、分家の善次郎が住處。此方の流水は我が家の屋敷に通じ、泉水、水屋、馬洗場、乃至、周圍の塚に注ぐ水。見所なき小河なれど、可憐い友に遇へる心地。眼前に廣い庭の泉水、築山、菖

蒲に緑を飾つた清い遣水、我が結びし椽、紅緑接分の楓、盪船浮べし所など思起す。家藏門のかゝり今も昔の面影を留めて居ようか。若し人も住家も變り果てなば、と可懐し戀し。一刻も早く行着いて見たき心焦燥の中にも、疑懼るゝ念と愁き情の胸底深く動くを覚え、何故の涙か、冷き頬にふりかゝる。父母の年を數ふれば、早や百歳にも餘れり、此の二方は到底存命へ居る筈なし。我が兄の善市殿も尤う當年は八十七。これとても生死の程覺束なし、姪甥など夥多居ようなれど、顔を見知らぬ我れに邂逅ひしとて、珍しとも嬉しとも思つて呉るゝ様はなし。百五十里の道を辿りて、此の村へ來着くまで、雨に風に

雪に突に老の身を弄らせし幾辛酸、それも故郷にて死に
 たき願望ばかり。借我が屋近しと思ふにつけ、快樂、希
 望、依頼の影のおぼろく薄れゆき、我れを此方へ牽き
 つけたる麗しの糸、ふつと断たれしやう、行き惑ひ立ち
 躊躇ふ。

何時の間にか月出で、照り榮ゆる雪、淨光眩ゆく、歪む
 我が影、鵝箋に寒鴉の筆意、あはれ顔へぬ。往く程に幼
 き頃目馴し杏墻際の小橋の上に出でつ。堰の水を我が屋
 敷に引く大樋も玆に掛り、漏り落つる音、一族團樂の昔
 の夢を囁く。外藏の高き薨見あぐれば、月明の白壁鮮麗
 に、何に驚く、簀に鳩の子の鳴く音、これも我が馴染の

一つなりき。轉る青年の我れを思ひ起して、半ば發芽せ
 る絶望の念も消え失せ、今は有無も分からの當時爐邊の
 人々の、可懐しき面影のみ胸に新たなる様覺えて、曲れ
 る腰も暢しやう、足の疲勞も頓に忘れぬ。

生墻に沿うて門の方に廻れば、入口の杉の大木、家の構
 へ、穀倉、木小舎など、都て舊の儘にて、物みな絶えて
 久しき我れを歡び迎ふる趣。この家の中には我れに親し
 く、我れを愛し、我れに優しく、我が老を慰むる者の、盈
 ち居るやうに思はれ、心自から勇んで、勝手口の戸を敲
 き、『御免下さい。』と云ふ中にも誰が出て来ようと、先づ
 其れが心に懸る。『戸は開かりやすぞ。入つて来さッしや

れ。』と若い男の聲。戸を開けて、廣い土間を通り、臺所の
 上櫃に腰を掛け、茶の間の方を眺むれど、何れも若き
 人々にて、我が知れるは一人もなし。胸塞がりて、涙の
 差含まる、許、遂頭下がりぬ。『もう六十年も前の事で御
 座りやすだで、何人も私の顔を覚えて居る方も、見え
 ない様で御座りやすが、私は此の家から生まれたもので
 ……』と語り出だすと、何れも怪訝な顔を爲て、互に
 眼を見合ひぬ。『私が善兵衛が三男で、善市と云つたのが
 私が兄に當る。私の名は善三といふ者で御座りやす。兄
 様が健在で御座らつしやるなら、烏渡呼んで貰ひやせう。』
 爐邊の主婦らしい、四十位の女。『はい、善市と云ふのが

御座りやした相に御座りやすけんど、疾うの昔、死なり
 やした。はい。』と冷かに答へて、足洗へとも、入れとも、
 寒からうとも云はず、彼方へ顔向けて側の雇人に何やら
 囁き、突と立つて次の室へ隠れつ。爐邊の男は、立膝に
 組手を掛け、唧烟管のまゝ、此方向き、『お老年の上で、此
 雪道、態々尋ねて御座らしやつても、此の先代が死なれ
 たとは何ともお氣の毒な事で御座りやす。此の家は元の
 儘に立つては居やすが、今の人達は家屋敷を買つて、他
 から來さつた人で御座りやすで、何もハア、分りやすめ
 えよ。』之も木で鼻括る挨拶。『では、龜田の家は潰れて了
 つたので御座りやすかい。』『はい。』『今は何處へ行つて

居やせうか。』『それがハア、分りやせんでな。松前の方へ落ちさつたと云ふ評判も御座りやしたつけが、久い跡の事で、御座りやすだでなア。』『ちやア、行方も知れぬえ様に、なりやしたかなア。』善三は上櫃の大黒柱に凭たれ、失望の涙に暮れて、少時顔を擡げ得ざりき。雪の夜道、外には風も荒れ始めたらしく、もう何處へ行かうにも的はなし足は疲れぬ。家疎らなる村里、旅籠舎のないは承知なれば、今差當る宿所にも當惑、何に憧れて人なき里を訪ふ爲百五十里の道を來たのであらうと、人前も耻ぬ歎歎に、正體なき様なりき。

例の男も少し氣の毒に思ひしか、『此所から半道許ゆきま

すと、大槻の驛へ出やすから、早く其所へ出さつて、宿屋へ泊らさつたら宜う御座りやせう。』と宥むるやうに教へ、『氣の毒な事だなア。』と煙管で今吐いた痰に灰をかける。善三は途方に暮れ唯惘然と暖かさうな其邊を見廻し、左右の答へもなかりき。間の抜けた時分、『はいく。』と涙を手の甲に擦り上げぬ。

正面に姫小松の尺二寸幅の惠比子長押、煤色深けれど、拭込める跡麗しう尺角程の榎の柱、故々しき斬の痕のみ著く、數百年を経し建物とは誰が目にも見え、鑑長押の上懸並べたる十二の提灯箱の丸に三重の松は、外に類のなき我が家傳來の定紋。偕も不思議と見遣れば、神棚

の裝飾から、其邊の調度まで、我が記憶ある品々多きに、
 爐側の炭箱には筆太に龜田氏と墨色新らし。愈々心迷ひ
 て、一段高き彼方の茶の間の方を見遣れば、主人らしき
 四十前後の男の、氣遣はし氣に、折々此方を覗く、其の
 眼形容貌年こそ若けれ、我が兄善市に生寫なり。さては
 我れを欺きて、追出す分別、此の老たる叔父が長き旅の
 野山に宴れ、我が故郷、我が生れし家、一族の者の戀し
 きばかりにて遙々尋ねて來しを名宣合ひもせず、唯一言
 の挨拶もなく、門前拂ひ食はす氣と見える。那麼心の陋
 しい人の住む家に、縱令我が生れた棟下とは云へ、一夜
 の宿も、何快く借らう。人々の胸の底は尤う能く讀めた、

一刻も這磨とところに長居するは氣が腐るばかりと考へ、
 『これは飛でも無い疎匆を致しやした。皆様實に、お邪魔
 で御座りやした。』と憤怒に驅られて戸外に出づれば、肉
 削ぐやうな冷き西風。木を拂ひ、道を撫で、捲き狂ふ
 雪海嘯の如く、僅の間に人跡埋め、咫尺も分かぬ天地濛
 濛。息つまり、肌凍え、一足外れては腰までがばと陥り、
 踏之らして反様に倒れ、襟より袖より吹込む雪、忽ち融
 けて骨刺す程の冷たさ。風も吹け、雪も降れ、人の心の
 無情に比らべては、是れ式のこと辛しとも思ひはせず、
 と齒を食締めて、尙的處なく彷徨ふ中、氣力衰へ、體疲
 れ、足凍え、一寸も動かれず、大木の蔭に身を寄せ、唯

茫然と佇立めり。我れ十八の秋、口惜き事ありて一旦故郷に愛想を盡し、再び此の土は踏まじと誓ひを立て、踏出してから以來、六十餘年他郷にさまよひ、身に受けし憂さ、辛さ、其れを思へば、甥が今夜情無き待遇も、蚊に螫されし程にも無き筈なれど、止途なく涙の零るゝは、何う云ふものであらう。來て見れば、微塵嬉しき所なく、便に成るでも無い故郷を、何を周章えて可懐しき空、樂しい土地と、久しい間、迷うて居たのであらう。思へば我が心の淺薄さ。この思はしき故郷の雪に埋もれて、只今こゝで野倒死を爲るのか、と悔恨の餘り、拳固めて地上の雪を打つ途端、體崩れて後へ挫と倒れぬ。又一時刻

うと巨濤の寄するやう、大吹雪吹き捲くれば、善三は宛然満身雪埋に爲れし如く、起あがる擬勢も盡き、何時の間にか、昏々として生死も知らぬ睡に入りぬ。

* * * * *

心地よき春の口に、春照らさせて、孫娘に新聞讀ませて聞きながら、植木屋に苦言いふ樂隱居の夢覺むれば、何處の家の座敷か知らねど、身は重ね蒲團の上に横臥りて、腹に足に湯婆入れ、枕頭には藥の包紙、湯呑茶碗など有り。我が生れし家を訪ねて、追出され途中、吹雪に鎖ちられて倒れしまでは思ひ起せど、其の後の事は少しも覺えず。洋燈の光に頭を擡げて、周圍を見廻せば、古風な

造作なれど、相應結構なる座敷にて、十二疊の間に一間の床もあり、神農の墨繪の軸、欄間には潤屋の二大字の扁額何うやら以前見たことも有るやうに覺ゆれど、何人の住居とも寤と覺りかね、薄氣味悪く、魅されでも爲たのでは有るまいかと、心を沈めて其邊に眼を配れど、眞逆爾いふ景色も無し。借は慈悲深き人の通りかゝりて、我れの行倒れに成れるを、救うて此所へ連れて來て呉れたものに違ひ有るまい、と漸と勘づき、其の人に會ひて禮を陳べたしと思へど、體更に利かず、起上る力もなし。室數多く隔たる彼方には、人の話聲も聞ゆる様なれど、近き邊には誰も居ねば、此所は何處の誰が家なりやとも

問ひがたく、唯まぢりく襖の繪や天井などを眺めて居るのみ。

程經て二十五六の、人柄尋常らしい、鐵漿つけし女房出で來たり、優容に枕頭に座を占め、「老爺様、氣分が癒りやしたか。眼が醒めさつたと見えやすが、粥でも炊いて上やせうか。」と優しく問うて呉れる。善三は彌々感ひて、「はいく。」と唯枕に絶つて、額を擡つけるも禮心。「未體が本統では無かんべし?。」と又尋ねる。「色々先あ斯うお世話様になつて居りやすだが、此所は一體何處で御座やせう? 此方のお家は何方様と云ひやす? 私は何だか。宛然夢見るやうで、何やら全體分らねえ。何ういふ譯で、

斯う結構な座敷に臥て居たか、一向様子が知れねえで、不重寶を爲やした。」と蒲團を運び落ちさうに身を焦燥く。「これ、老爺さん、静に爾やつて居るが宜う御座りや。お前さんが不審がるも至當で御座りやす。」と婦人は微笑み、此の家の主人二代目善次郎が村の無盡講の歸途に行倒れになつて居る老人を見つて、未體に温氣が残つて居るは好運、手當を爲たらば蘇生るまいものでも無いと、従者の下男に脊負はせて歸り、顔を見れば、亡くなられた老父様に能く似て居られるので、一入心をつけて手當を爲、大事に此へ寝かせて置いたら、今に目が覺めよう、旅の人であらうけれど、氣の毒な老人の一人旅行、

己が見つけし許に、生命を捨てて進せられる、此位僥倖なことは無い、己も善い功德を爲た、と喜んで居られる。後方自身に御挨拶に見える筈と、詳しい話を聞き、始めて事の次第も分明り、外ならぬ我が家とは深い縁の善次郎の情に救はれしかと、今更のやうに嬉涙に老眼を濡しぬ。善三は旅を彷徨ふ中、長年心がけて貯へし金、積りて七百圓餘、これを土産に故郷に歸り、生れし家にて老境を送り、父母の墳墓の土になりたき望みにて、迢々尋ね來しに、乞食老爺と思ひてか、厄介者と見てか薄情な挨拶、欺して追拂はれたる事情まで、善次郎に語り、此方も迷惑であらうけれど、繋がる縁と諦め、生命助けた序に、

一生の面倒も頼みませうと、件の金を差出して只管行末の擁護になるやう、懇望の言葉を盡しぬ。善次郎は快く引受け、金が有らうと、有るまいと、私が爲には叔父様一人儲けしばかりも、此の上ない悦喜。誰が管つて呉れずとも、私一人で御安堵の出来ますやう、心をつけて上げませう、必ず御心配には及びませぬ、と情深い誠心見える言葉に、善三始めて故郷だけの事はある、爾見限つたものでは無い、と心の中より頼母しがりぬ。

善三が七百圓の金を土産に、分家の善次郎が方に食客となれる由聞き傳へ、急に本家の方よりも人橋かけて、「先日主人不在にて、雇人供が不重寶な事申上げたげに御

座りやすが、其れは少しも主人の知らぬ事、甚だ失禮を申上げて、相濟まぬこと爲やした。萬望お怒りなく、此方へ是非に來るやう。」と蒼蠅い程迎への者續きぬ。善三は本家の人々の心の底を尤う充分に見抜きたれば、素より薄情な畜物供の住む園を、再び踏ぐ氣はなし、善次郎も腹立ちて、「其の位に思ふなら、何故先夜尋ねて御座らしやつた時、追拂ふやうな目に遭はした。那樣人非人の手に、大事の叔父様は預げられぬ。」と毅然と断りぬ。その後も尙叔父争ひ長く續きて、「我が家より生れた者を、此方へ引取るが至當、他の者が邪魔する理由があるまい。」と自然角目立ちて言ひ罵り、果は雙方の確執となつて、

法廷へ願つて出でしとか。叔父訴訟の噂、今も近村に知らぬ者なし。

(明治三十五年末稿)

皿の缺片

(上)

銀の色に照反す雲の峰の、崩るゝばかりに危く懸る空の下、梵字川の岸の松林に、村の百姓十五六人、車座になつて、喧囂頻りに語り合つて居る。

(一)「作平殿も聞かしやつた通り、法院様の仰しやるには、折う凶作が續く、疫病は流行る、それに降りさうな雲は毎日那の通り眼の前にぶらり、下つて居るけど、一向雨が降ンねえし、もう百日餘りの早魃だ、是れではお

互に乾死ぬか、餓死に決まつた譯ぢや。で、私も氣を揉み、篤と大日様へ御祈禱を爲た所が、有難い夢託宣があつたのでう、太十殿！それを村の衆へ告げて呉れせえ、人救助ぢやに。」と斯う仰しやるだよ……。」

(二)「そこでな、皆の衆！、今日茲へ寄つて、兎も角とツくり相談を爲べえと、斯う觸れやしたのし！」

(三)「一體その法院様の有難い夢託宣といふの？何ぢよ爲た事を云はしやつた？」

(一)「その事だてよ。皆の衆！づつと此方へ出なさろ！粗略に聞いてはなんねえ……。」

何れも唯事ではあるまいと眉を寄せ、容易ならぬ顔色で、

太十の傍近く圍んだのである。太十は勿體らしく咳拂ひを爲て、

『法院様への夢のお託宣と云ふは、外でもねえ、昔惡僧が此の村にあつて、お湯殿山の御寶物に納つてゐた、佛舍利を盗み出して、一儲け爲べえと企圖んだげな。が、

悪い事は無んねえわし！その坊主が手に取つて見ると、何う考へても兎の糞としけえ見えねえ、此奴別當め！眞

物と兎の糞と入換へ居つた、憎い奴ぢやと、そのお舍利を此の川の中へぼちやりと投げて了うたげな。』

(二)「その有難いお舍利様は、その後何百年が間、この川の泥や砂利に埋つて居ただアが、此の度時節到來して、

世の中へ出さる譯なさうぢやけんど、有縁の衆の手を假りねえでは、浮びあがる事も無しねえ。世に出てい、出ていと足掻き藻掻く一念が、この村へ報ッて、色々悪い事ばツか續くことになつたげな。

(一)「だに依ッて、法院様の仰しやるにや、大日様のお託宣には、村の衆が一心に我を信じて、三日三夜、この川の中を捜し廻ると、屹度その佛舍利を拾ひあげさして遣るべえ。それを世の中へ出して、禮拜怠らない曉は、五穀豊穰村中安全、何事も願ひ事は叶ふ、と斯う言はッしやツたげな。」

(二)「神佛に嘘偽は無え筈ぢやで、そのお託宣に従え申し

て、一つ一生懸命、お舍利を探すことに爲ては、何ぢよだと思ッて、今日茲へ寄ッて貰ひやしたのし。」

(三)「そのお舍利を探し當てた者は、一代の長者になれると言ふ事だし、村もお庇蔭で繁昌すると云ふだから、茲は一つ、私等に任せて、皆の衆！何ぢよだ？一同の者が氣を揃へて、探して見べえでねえか。」

(四)「それは好い。直にこれからお舍利拾ひに取掛ると爲べえで無えか。なア、村の衆！」

何れも別に資本のかゝる仕事でなし、多寡が三日の時潰した、萬一探し當てたら、長者に成れまいものでも無いとの胸算用。宜からう、行るべえと、直に相談は一決爲

皿の缺片
たのであつた。

(下)

同勢十五六人思ひくの方角に向ひ、砂を掻き、石を取除け、瀬を涉り、淵に泳いで、頻りにお舍利を探し始めた。
一心不乱に神佛を念じて、眼を八方に配って探し廻るものもあると、無闇に口に『授け給へ！助け給へや、神々様！』など、端唄もどきに唸って、小魚の泳ぐのや珍石などへ目を移して、何時かお舍利を忘れて了ふものもある。かと思ふと、血眼になつて狂ひ廻り菜螺の蓋を拾ひあげ

皿の缺片

て、
『ソラ、いよくお舍利様だ！』
と高く差あげて、仲間に誇るのも現はれた。が、忽ち偽物の正體見現されて、一同の物笑ひとなつたものもある。數里の間、岩を跳越し、水を涉って、早瀬に惱み、淵に疲勞れて川を下つたのである。何れも氣は亂れる、眼は眩暈む、五體へとく、に萎えて、徒らに焦躁るばかり。その中、衆に優れて一向專念『天清淨、地清淨、六根清淨！』と續けざまに唱へて、最先に進んだ太老爺、碧巖の断崖下、水の緩く渦巻いて瀬へ落ち込む此方の、鐵色の砂利の中に佇立み、何か拾ひあげた様子。やがて岸

へ獨り足迅く駆上つて、小高い巖に突立ち、
 『サア、皆の衆！お舍利様は此の太十が手に入つたぞ、一同近く寄つて、拜まッしやれ！』
 聲ふりしぼつて叫んだ、
 村の者は呆氣に取られ、『野郎、何嘘を吐くだア！』馬鹿ア吐け！』など、却々信せぬのもあつた。併し何れも探し倦んだ末で、もう精も根も盡きて居るのだから、縦令何も探し得なくも陸へ上つて休憩たい、と内々思つたのもあり、お舍利様より鮫の一足も獲つて、酒でも飲むが割に合ふと迷ひ出したのもある途端、今の聲を聞いたなら堪らない。一人二人は何太十奴がと、鼻であしらつたの

もあるが、多勢一時に先を争つて岸へ駆あがつた。
 △『お舍利様は何處に御座ッしやるだよ。』
 ときよろ、木の根を廻つてゐるものもある。
 『やれ、有難い事だぞ。何とお舍利様が此の村へ出さるといふは、後生の好い事でねえがよ。』
 有難涙を零して、地上へ跪坐つて、太十老爺の足に向つて頻りに拜み始める。と、老爺の菅笠も圓光のやうに尊く見え、外道髯の眞黒な面も羅漢様の再來程に有難く、
 『太十菩薩、太十菩薩、南無太十菩薩！』と聲高らかに唱へて、三拜九拜するのもあつた。何れも些と逆上の氣味だ。

その中、分別顔を爲た若者が突と前に出て、
『そのお舍利様を、ドレ拜まして貰ひやすべえ。』と手を
伸ばした。

太十『インにや。お前等には見せられねえだ。勿體ねえ。
汝等のやうな不淨な手さ渡したら最後、お舍利様は飛ん
で行かしゃるも知れねえだ。却々容易な事では拜ませら
れねえ。』

甚く勿體をつけて、力み返る。

『何？拜ませねえと、太十老爺奴、見せねえと云ふから
は、石塊でも握つて、獨りで力んでるも知れねえだ。馬
鹿くしい！』

若者は相手に爲す、匆々と村へ歸つて了つた。
他の執心な面々は、是非拜まして呉れと、手強く迫る。

『なんね、く、何ちよにも茲では見せられねえだ。立
派に御堂でも建て申して、それから汝等にも拜ませべえ。
己を拜まッしやい！己をよ！己を拜まッしやると、お舍
利様を拜むと同じ事だ。』

いよ／＼逆上が嵩じて力み始める。

氣の迅い、血の多い手合は承知せず。

『何？何處までも見せねえと、汝！他を馬鹿に爲るだア
な。見せねえからは、何を獲んで、高慢な事を吐すも分
ンねえ事だ。見るやうに爲て見て遣ンべえ。』

三人五人太十を取圍んで格闘となつた。

太十は一生懸命、右の手に掴んでゐるお舍利様を取られまいと、足掻き、藻掻いて、必死に争うたが、遂田五作の大力に敵はず、脆く砕ぎ奪られて了つた。悔しがって、取返さうと追かける、傍の者が抱き止める。田五作は悠悠と切株の上に突立ち、

「皆の衆！これ見せえ！何んだ、充らねえ、皿の缺片だぞし。や、馬鹿くしい。」

大勢の前へ投出したお舍利様を見ると、果して方一寸程な錦手の皿の缺片であつたのだ。(明治三十九年四月稿)

さらば酒

(上)

在郷軍人中、この近邊で、先づ將校の班に入るのは、己が村の親方様の息子ばかり、と一郷の自慢の種に成つて居る涌井精一郎は、昨夜突然戦時召集令に接した。彼は一年志願兵出の豫備少尉である。直その東隣家の故善十郎が忤の乙松も、後備兵として、同時に召集の命令を受けた。集合地到着の期限は来る○日午前八時、猶豫は唯間三日で、明後早朝には出發せねばならぬ。

精一郎は元より今度の國難に殉する覺悟、生きて歸らうとは思はぬので、今朝早く床を離れ食後服を改めて祖先の墓に暇乞の參詣を濟まし、歸途は村中の親類や昵近などへ訣別を告げに廻つた。別盃を酌まうよと強ひられた所もあれば、酒よりは蕎麥が好物か、討つと言へば延喜も善いからと、馳走に散々なつて、宅へ足の向いたのはもう點燈頃であつた。

小學時代の水練の稽古場として馴染の深い小鼓川の土橋を渡り、乙松が水車小舎の傍から道は丘陵の上に通ずるのである。七八十戸程の村は半雪に埋もれながら、茅葺家根黒く、炊煙青く立上つて、地圖を開いた様、鮮明に

見える。再び此の地を踏まぬと誓つた心には、一種特別な餘韻長き色を以て、我れを送るやうにも覺える。彼處の木蔭、此方の小山、塚も杜も小川も田も畑も、皆我が過去の生活の活畫を喚起す憶出料ならぬは無い。高き白壁の土藏、那は九左衛門が屋敷。彼が娘の阿作が今生きて居たら、二十四五で好い内儀盛時であらう。一時は浮身を窶して彼に焦れたこともあつたが、少年の戀は虹の色に褪め易いとは云へ、是れは又格別、儂い夢の跡を手探り爲るやうな心地。彼の松の太木の下には、子供の頃に無二の親友であつた某が埋められて居るのだ。枯柳の疎に立つ那の屋敷は、自分を幼少の頃から能く親切に爲て

さらば酒

呉れた阿徳姫が家だ。と斯う眺めるに連れ、萬感簇起つて、其れから其れへと、聯想の絲絡み纏れて、此の土地を離れとも無い様な氣が爲て、少時恍然と佇立んで居た。時節柄だ、村の子供が吹く喇叭の響が聞える。何處かで『進め！』の號令も聞えるやうに感じた。精一郎は忽ち『己は軍職に在るのだ、戰場に向ふ身である。』と氣がつくと共に、今まで稍崩れて居た體を嚴然と立直して、歩武正しく我が家を指して雪道を急いだ。

門口へ來ると何となく、家の中は賑かな氣勢。いや心地快いわい、老爺が氣を利かして昨日の新聞で知つた旅順海戦大捷利の祝意を表して、日丸の國旗が二旒、左右の

さらば酒

簷頭高く翻飛と夕風に鳴りはためいて居る。もう靴音を聞いて兩親を始め遠方の親類友人村會議員諸氏、その他近所の誰彼二三十人許、待ちかねて玄關までの出迎へである。精一郎は快活に笑つて、

『マア、復花婿になつた様ですな。皆さん失禮！』

磊落に挨拶して入つた。實は花嫁の阿袖も人々の後に小くなつて出迎への中に居たのである。彼は涌井家に嫁入爲て、未滿二年とは經たぬので有つた。

此の夜は來合せて居た者一同を集めて、祝捷を兼ねての首途の祝宴を開いた。勿論質素な手料理で、酒が追々廻るに連れ、軍談の調子も高く、中には自分が一人で露西亞

「李その位無えのし、私等が山へ柴刈に行きやしてもな、櫓の後押が無えでは、思ふ程獲つて来られやせんからな。」

「奈何にも、く。」と調子を合せて、矢鱈に飲んで居るのも有る。上席の方を不圖見ると、陸軍歩兵上等卒の夏服の垢染たのを着て、ツボン代用に股引を穿き、容儀正しく坐つて居るのは、隣家の乙松、今度の後備召集に應じて精一郎と同じ戦場に向ふ其の一人で、當家でも特に招待して破格の優遇を與へ、辭するを強ひて上席に就かしたものである。精一郎は微笑爲ながら、大盃を捧げて乙松の側に坐を占め、

「乙松——一つ遣らう。」と自分で酌を爲て遣り、「今度は一

緒に露西亞へ行つて、首府見物が官費で爲て来られるな。

ハツハ、。」

乙「ハイ有難う。是非何處までも連れて行つて戴きたいものです。」

徐ろに飲乾して『サア貴君へ。』と精一郎に返盃した。少尉も快く飲乾し、

「併し君の所ぢや、跡は婦人と子供ばかりだから、随分氣の毒な譯だが、宅の阿爺も及ばすながら世話を爲ようと云つて居るし、村でも黙視ては居まい。先ア心配を爲すに……、今度は對手が敵だけに、働き榮がある。お互に遣れるだけ毅然遣らうよ。」

さらば酒

少し俯向いて居た乙松は、無量の感慨に打たれたらしく、「頼みます！」と小聲で云つて、突然に精一郎を肩から犇と抱き、

乙「若旦那！死ぬ時ア一緒に死にやせう!!」

精「オウー一緒に死なうよ。」

少尉は微笑みながら、手を伸べて堅く乙松が腕を把つた。萬歳の聲は梁を震はした。感涙に咽んで鼻を吸る聲も座に満ちたのである。

(中)

愈々明早朝は出發となつた其の朝、精一郎は多年自分の

さらば酒

事業と爲て經營に力めた牧場を二階から見渡した。疎な立木が雪野原に寂しい趣を添へて居る景色に對して、一種言ひ知らぬ訣別の情に堪へなかつた。更に彼をして一掬の涙を濺がしめた者は、彼が愛育に依つて生長し、誇るばかりに肥大になつた牡牝合せて數十頭の牛に對する哀別の情で有つた。此の時端なく、彼は隣家の乙松が水車を見棄て、行くのは、妻子に別れるより數倍辛いと云つたを、小慧い言葉を以て慰諭したのを思ひ浮べ、慚愧の情に堪へぬのであつた。

「今お前が戦地へ行つて了ふと、跡では水車を休まして了はねば成らぬ、其れが甚だ遺憾だといふ。成程至當だ、

さらば酒

併し考へて見るが宜い。今まで小さな水車を動かして居た
 同じ水が、思ひ切つて幾十丈の断崖から落ちると、サア
 今度は何萬戸を照す電燈の原動力ともなる。何萬人を運
 ぶ電車をも動かし、口に何萬圓の貨物を製造する機械の
 運轉も爲せ得るでは無いか。我等が死を決して軍職に就
 くのは、無用の水が断崖から落ちるばかりで、有要の原
 動力に成るのだ。今度我々の動かすのは東洋の運命とい
 ふ大機關ぢや。」と云つて諭した。

乙松を諭したのは、我れながら旨かつたと思つたが、自
 分が多年經營爲て、是れだけに成功した牧畜事業を棄て
 て行くのは、何うも未練らしいが遺憾だ。自分が居なけ

さらば酒

(下)

れば、手不足では有り、阿爺には行き切れまい。牛は賣
 られる牧場は畑に成であらう。無論それが至當の處置だ。
 斯う考へて、精一郎は惘然牛小舎の前に佇立んで居ると、
 茶褐斑の牝牛が、悲しげな聲で長く鳴いて、顔を飼主の
 方へ伸べた。宛然訣別を惜むかのやう。續いて彼方でも、
 此方でも、哀れ氣に鳴送すので有つた。

「赤い達者で居ろよ。」

滑かな其の額を撫て遣つた。彼の眼には確に涙が浮んで
 居た。

さらば酒
 出發の朝は村内の有志親戚朋友二百餘名、精一郎乙松の
 二勇士を送らうとて、門前に群集爲たのである。「決して
 人の前で、泣くやうな女々しい舉動を爲ちやア成らんぞ。」
 と寢物語に繰返して嚴命された、妻の阿袖は良人の出征
 の支度に精勵しく立働いて、他が「嗚御心配で御座いや
 せうし。未來さつてから間も無いのに、實にお氣の毒で
 御座りやす。」といへば、「否。お國の爲めに働られる軍
 人を良人に持ちやしたのは、不束な私の身に餘る程な名
 譽で御座りやすから、些とも愁しいとは思ひやせんし。」
 と誰れやらに教へられたを、其の儘の覺束ない口吻。學
 校で習つた修身のお蔭では有るまい。常に結はぬ、赤

さらば酒
 い手柄の色鮮明な丸鬘の、遂屈み勝になる横顔の、日頃
 には無い寂しさ。是れも見人への心柄か、實家から達
 した岩崎八幡の御符を、人に知られぬ様、窃と紙入に入れ
 て渡す。「護らせ給へ。」の心哀れ！
 母親は其れ藥、それ守護袋と騒ぐ中にも、始終悴の顔に
 眼を離さず、呢と見ては窃と涙を拭き、「精やお前、卑怯
 な事は爲て成らない位無えけんぞ、無闇に功名が爲たい
 など、思つて、態々丸に中るやうな真似は爲ちやア成ん
 ねえがら！何でも御規則通りさへ守つて居れば澤山だ。
 それで立派にお上の御奉公が勤まりやすだから、矢鱈に
 丸の中などへ行つちやア成んねえぞ。」

精一郎は微笑みながら、母の誠心忝けなく身に泌み、

「阿母様！案じて下さいますな。今は陸軍ぢや丸に中らない術が發明に成つて居ます。」

「今立つと云ふのに、年寄を馬鹿に爲て居るだア。何でも氣をつけせえよ。」

「ハイ」

阿爺は本綿袴の禮服用で、一々見送の爲めに來て呉れた人達に挨拶して、勝栗下物に冷酒の訣別酒を酌送し、

「精一！お前、今度行つたらな、宅の事などは心配爲ねえで、立派に功名を爲て來せえよ。」

「ハイ。今度働かなくつては働き時が有りませんからね。」

「己も此の通り亦達者だし、弟供も大勢居るだから、運

悪く萬一汝が死んだつても、跡は決して困らねえ。が、

捕虜には成らねえ様に氣を注げせえ。」

「大丈夫です。別にもう宅の方は案じる事も無いのです。」

「何でも卑怯だと笑れるなよ、己むを得ない場合は、潔

く討死して、日本男兒の魂を彼方の毛唐に見せて遣れ！」

「それは無論ですよ、阿爺！」

「然か。其れで己も安堵したが、先ア軀を大切に、

悪い病氣に罹らんやうに爲せえ。病氣など爲ては、お上

へお手数をかけるばかりで、何の手柄にも成んねえ。」

「然です。阿爺も軀を大切にすつて、私の凱旋を待つ

さらば酒

て居て下さい。今度勝てば日本は全世界に對して大威張
ですからな。」

『ウム、然よ。いよく亞細亞の盟主かな。芽出度い芽
出度い。』

いざ上途となつて、家族の者は屋敷の出口の小橋まで見
送ることになつたが、阿袖は跡形附が多忙いからと玄關
までは出たが、直に奥へ逃れて入つた。他に顔見られる
が苦しいからであらう。精一郎は隣家の乙松を誘ひに立
寄つた、此所は又老母に妻に、子供五人を遺しての出發
であるから、手間の取れるのも無理は無かつた。

『良人！氣を注げせえよウ。』

さらば酒

と乙松が喉は乳飲兒抱へて、門口へ送つて出たが、涙と
松煤で顔は堅縞になつて居る。村盡頭までの見送人中に
は、口の悪いのも雜つて、『軍人の泣面は餘り見よく無い
もんだ』と、暗に乙松を罵つた奴も有つた。精一郎は屹
度その者の方を睨んで、

『勇士が妻子の訣別に翻す涙は、いざ戰場となつて一粒
が二十二斤砲の砲彈程の力が有るのだ』と喝破爲たので
ある。

(明治三十七年末稿)

月の一夜

坂下、塔寺の驛も過ぎ、氣多の宮の追分から越後街道を右に見て、左に入る山路、七折坂に足も疲れ、名物の餛飩掛豆腐が箸にとつかり腰を卸した。柱時計を眺めると、もう午後五時に些と経過つたのである。同伴の老人は却却の足達者、暖氣にも伴とも馬とも云はぬ。若い身空で、其の汗だくの太息は何事と、謂ひたさうな調子で、此の炎天にも挫けず、立寄る茶屋々々に茶碗酒のぐい飲、「今の若い者は」と臭い氣焔を吐かれるので、此方は愈々辟易。やつと此所まで漕ぎつけ、「柳津までは何里あるのか。」

と聞けば、茶屋の媼は「もう直で御座りやさア、二里にやア近かんべなんし。」「オヤ、尙二里あるのか。」と溜息つけば、同伴の老人は高く笑つて、「媼さん、先ア聞いて呉れ。其の溜息のオヤ、は何だい。今の若い者は是だ。情ないやねえ、媼さん！お前や己達の若い頃は、飯豊山へ日歸りで行つたものだッた。ノウ媼さん！」「眞實に爾で御座りやした。」と相槌を打つ。自分も忌々しいので、味噌塗餅に腹を拵へ、疲れた足を踏伸して、爪頭上りの道をへとく、に成つて登りながら、額の汗を忙しく拭き繞る山幾疊、田中の里の松原に日懸りて、只見川に茜流るゝ頃、やつと柳津に着いたのである。

柳津は虚空藏堂が名高いので、會津名所の一つに數へられては居るものゝ、眞の山間の一寒村で、戸數は僅四五十もあらうか。流石屋並は町がかつて、旅舎ばかりは存外多いけれど、正月の七日堂と三月の十三參詣に、諸國からの參詣人を唯一の花客とするのなれば、常は空屋同然、ひっそりと爲て居る。

自分達は村中の谿流に架かる石橋を越え、相應險しい坂を躋つて、只見川を一目に瞰下す、斷崖に臨んだ桔梗屋といふのに、泊めて呉れるやう頼んだ。

足盥に蜘蛛の巢懸り、椽側の板光澤褪せて、塵白く、長押、天井、高窓など漏の痕か、鼠の疎匆か、其所彼所に

心地悪い汚染の夥多しいのが先づ目にたつ。西北眺望の角の座敷を選んで、案内して呉れたのは嬉しい。蹒跚ながら通つて見ると、畳ひたくと足跡に粘着くやう、坐れば何となく可忌な濡氣ぼい異臭、ひらくと襖の隙間から風の如く襲ひ來るのであつた。神代杉の裏板、樺の長押、槐樹の床縁、山家にしては先結構な座敷で、天井は高し、十二疊の會津間だから、廣々と爲たものである。村の老夫が出合に寄つた圖かとも見える、竹林七賢の黒繪の襖に向つて、夕飯を了ひ、石風呂といふ珍しい物で浴して、横に臥りながら、夕靄に浮ぶ虚空藏塔の岩山に、燈明の數、追々と殖ゑてゆくのを眺める頃から、直我等

が座敷に續く廣椽に、四五人の若い女が、何處に今まで隠れて居たのか、現はれて來た。夕飯の通ひを勤めたのも勿論雜つて居る。

△「お若さア、お前でねえがよ。此の紅皿を打缺たのは？」

▲「己ア知らねから！お花さアに聞いて見つけえ！」

□「お爲さア！襟さア塗て呉んせいな。己お前の髪を直して上げるがら！」

×「あい！親方様の藏見るやうに、眞白に塗りせい。中田の兄様が嬉しがんべい。アツハ……。」

□「人を輕蔑るもんでねえ。お前も一生懸命お盛粧して、九本木の老夫を待つて居せい。」

×「これよ！此の女郎、口の悪い誰に習つたやう、九本木の藥罐が教へたのが？」

△「お爲さア！何う爲ただアよ。お花さアに酷く輕蔑られるでねえが。」

側迷惑も管はず、姦しく語り罵る中、お花と呼ばれた肥満女、諸肌ぬいで、乳の邊まで白粉を惡濃く塗る。お爲と云ふ馬面の色黒なのは、唇一杯に紅を舐めて、鬢を頻に撫廻す。此方では腹這ひになつて、椽の外に兩足を投出し、雨落の小砂利を、趾頭で、ちやりくと弄りながら、頬杖の鼻唄で「誰に見しよとて紅鐵漿つける。」などと問の伸びた節で唸るのである。折々艶話たり、翻弄し

たり、摺合つて、どたばたと格闘にも成るので、騒々し
 さと云ふものは無かつた。その中、洋燈に火の入る頃に
 は何れも化粧が済んだと見え、奥へ姿を隠して了つた。
 自分達は旅の疲労に睡氣を催ふしたから、早速床を伸べ
 させて寐て了つた。空腹へ鮎料理の満更で無かつたのに、
 些と食過ぎて休んだ所爲か、取留のない夢を續けさまに
 見て、遂枕頭の椽側の邊に人の笑ふ聲、語る音、乃至踏
 み轟かす響などに驚かされて眼を開らいた。もう午前の
 二時頃でもあつたらう。縦横に破れた障子に、隈なく月
 影白々と射して、疊の目も数へられるばかり。夏の間は
 雨戸を締めぬが、此處の習慣であるさうな。

尺八の節面白く、吹進んで居る男の影も映る。駒下駄と
 んと踏鳴らして、
 ○『お花さア！お前、甚く面の色光澤が悪いでねえか。ハ
 ツハ、。おッ危険！』
 花『作様ーお前、人が悪いな。那樣こといふもので無え。
 マア上がらせえよ。』
 ○『今年はお前、一束二合の作で無えがよ。遊んで居られ
 べえか。』
 『那樣ことは何とでも宜いわさ。己が遊ばせて上げべえ
 し、お前のやうな可愛い男なら。』
 と横から口を出したのは、お爲と云つた女の聲である。

「お前等に可愛がられては運の末だ。なア朋輩！」

「運の盡なら未可いけど、鼻の離別が悲惨だからなア。」

花「指いて呉んろ！悪口ばかり。那樣こと言はねで、お前達上がらせえよ。作様、新様、サア衝と入つて、何時もの通り、中將姫の地藏和讃でも歌つて聞かしせえよ。」

訴へるやうに勧めるのであつた。

「縁が有つたら、又の月日のめぐる頃、手拭の垢でも洗流して、惚られる様に出直すべえよ。」

「マア月でも眺めて、床が寂しきやア、熊班でも抱いて寐せえ。」

口々に男は冷評して、去りもせぬが、上がりもせず、庭

の断崖縁に佇立んで、納涼ながらの仇口を敲いて居る。

「サア入らねえたつて、もう離さねえ。」

と疍高なお爲の聲。

「コラよ、離しせえ。袖が切れるだアに。離せ、止めッ

せえ。」

と焦燥つ男の聲。椽の上下で、足踏荒く引張合ひが始まつた。その中微に囁く音、何うやら談が纏つたと見え、二三人が結局女に釣上げられたらしく、南端の椽側から奥の二階へ上がつて了つた。

跡は一刻ひッそり、月影一段清く、障子の破れを弄る風、ひやり／＼肌に沁入るばかり。

悉皆入つたと思ひの外、坂の下口の斷崖の邊に、先刻お若と呼ばれた、疲肉な、寂しい面貌の女、唯ひとり人待顔に悄然と立つてゐるのが、障子の破目から覗かれる。彼は深く項垂れて、何うやら泣いて居る様子であつた。時計は次の室で丁度三時を打つたのである。程なく五十六とも見える老人が、坂を上つて來た。奈何にも醜い服装で、總ての様子からして、何處に色戀の香氣もあらうと疑はれる。

『お若坊！待つて居て呉れさつたなア。』

『あいよ。己ア先刻から、幾度橋まで降りて往つて、お前の影が見えるかと思つて、見に行たか、知れねえだよ。』

人の心も察しねえで、お前何爲て居たァよ。』

『己だつてお前、待つて居るべえと思つたで、氣が急いで成んねえけど、孫を抱て寐て居るだで、善く睡入らせてから、扱て出るべえと思つてな。』

『孫だなんて、お前、鼻様が側を離れるが斷腸から、其んで躊躇して居たべした。』

『其んな事いふもので無え、人が聞いても悪い、笑はれべえに。』

『何うせ己笑れて居るだから、管はねえわし。親程年の違ふ、お前に惚れて、斯う苦勞を爲てるだァもの、笑はれるのは當然だから……。』

「お前の爾いふ情に陥没つて、己も此の年になつて、孫子の前もかねて、身を棄して居るで無えがよ。」

「己だつてお前の、其の深切に迷つて、若え男衆に馬鹿にされても、切られ無えで居まさア！先アお前、上がらんしよ。此所は川風が冷々して躰に毒だから！」

「否々。今夜は上がつて居られねえ。お前が煙草錢にも困つて居るべえと思つて、コレ己が馬沓作つたのを溜めて、漸と貳拾錢持つて來たッアよ。」

「お前の深切は忘れ無えよ。ぢやア折角だから貰つて置くべえなア。そんなぢや、今度は何時來さるのし？」

「山の堅木を賣つたら、屹度來て、お前にも腰卷の一つ

も買つて遣んべえと、樂しみに爲て居るだアよ。」

「然がし。そんなぢやア、些と内情話があるだアから、那の物置の所へ、一寸來て呉れさんしよう。」

「然が。」

二人は南へ簷下を廻つて、木立原の藁小舎の方へ往つて了つた。

少時たつて、お若は老夫を坂の下口まで送つて出て、

「そんなぢやア、待つて居るだよ、老夫！己はお前の外にやア、便にする人は無えだがら！欺して呉れさるなよ。」

聲の曇は涙含んで居るのであらう。

「何、己が若え女子を欺して、何うすべえ。軀を大事に

爲て、待つて居せえよ。』

『あい。待つて居るだから。忘れて呉んさるなよウ!』

坂の上と下で呼送す聲が、夜の寂寥を破つて、一種云ひ

難い、物あはれな調子に聞える。

お若は老人の立去つた後も、斷崖上に佇立んで、抜袖の

後姿肩寂しく、

『あア、究ない。炭焼の内儀にでも成るべえがなア。』

勝しぼる様な聲で呟いて居た。

その後の様子は知らぬ、熟睡して了つたので。翌朝は魚

淵から虚空藏塔に参詣して、田中の觀音へ廻つたのであ

つた。

(明治三十五年末稿)

假病

(上)

隣家の外妾が内園では妖冶しい笑聲に混じつて、しやれ

羽根の音が聞える。と思ふと、角の質屋が土藏の方に

當つて、大神樂の賑な囀子の響音、陋路を駈出す子供の

駒下駄と妙に調子が合ふ。大通の方では、斷間なく、匆

忙しく、又勇しい俚の音がして、初荷の行列でも来たのか、

一段と喧騒しい人聲も微かに聞え、亂調子な樂器の音も

通つて来る。見すばらしい鳥追の姿が格子前から消える

と、萬歳の寐惚面が現はれる。世間は陽氣で、活潑で、奈何にも芽出度らしい。大工の吉藏は垢染た敷團に包まッて、踏反倒りながら、煤けた裏板を睨んで、此等の物音を聞いて居る。今日は正月の二日だと云ふに、暢氣な人だ、と裏の髪結さんが、障子の裂目から覗いて往った。女房の阿鶴は、流石頭は綺麗に結ッて居るが、頸から下には未正月が来ないのか、洗晒しの不斷着の儘だ。でも悪い顔もしず、臥て居る良人の枕頭へ静に歩み寄ッて、『お前さん、もう起きて、お屠蘇でもお上がりで無いか。今日は二日だと云ふのに、假病は延喜でも無いやアね。』吉藏は蒲團から顔だけ少し出して、『どッこいしよ。』と寐

返りを打ッた。
 『サア、お起きよ。些とばかりだけでも、お雑煮も拵へたし、今食へないと不味くなるわね。』
 『ウンニヤ、已起きねえ、一本熱燭にして、此へ持つて来な。雑煮だッてお前、臥てゐて搔込む方が、世話ア無クッていゝや。』
 『冗談お云ひで無いよ。臥て、食べると牛に成るてえちや無いか。第一お前、見ッとも無いやね、病人染てさ。』
 『牛に成る？結構！牛なんかはお前、お祭の花車を背負て立つてえ位、素的に意勢のいゝもんだ、已大好だ。サ

ア牛に成るから、熱くして一本持つて来な。

『下らない！』と笑って、『好氣なもんだ！』

阿鶴は勝手の方へ立去って、塗の剝落た八寸に、田作、数の子、鶉豆などの蓋物を載せ、爛徳利添へて、吉藏の枕頭に供へた。

『イヨッ有難い！ 憚んながら三井の旦那だつて、斯ういふ贅澤な真似は出来ぬ。』

手を伸して猪口を採り、

『オイ、北の方、憚んなから、お酌を一つ願はうせ。』

阿鶴は軽く笑ひながら、満々と注いで遣る。

『オツと危険！』口尖らして、願のお迎ひ、『翻すと聴か

ねえ、三行半だ、氣を注げねえ。』

『ハツハ、馬鹿に氣の小せえ三井の旦那だね、贅澤が聞いて呆れる。』

『フム、詫住居としやれた奴よ。』

『しやれも不断ぢやア歴きちまふね。』

『アツハ、無駄は後廻しと爲てよ、身を入れて酌を爲ねえな。』

『手酌でお上がりよ。人が来ると可笑いやね。』と軽く注いで遣りながら、『もう御年始が来る時分だから、私は彼方へ往つてるよ、宜いだらう。』

『可し、往つて居な。コラ序に屏風をくるりと廻して置

きな。それからね、忘れちやア宜けねえせ、誰が来ても、己等は脚氣で寝てると爾いつてな、何れ全快の上改めてお禮に上がると、旨く其所を欺罔して呉んな。」

「だッてお前、病氣でも無いのに、困るぢやアないか。」
「かまふもんか、己等は此でウンク呻ッて、調子を合はせらア、頼むせ。」

「酔ばらッて、大きな聲なんか爲ちやア可厭だよ。宜いかえ。ぢやア、其の積でね。」

「心得てらアな。」

阿鶴は行きにかゝる。

「オイ待ちな。」

「何だよ。」

「太坊は未歸らねえのか。」

「あ、未來ませんよ。お隣家の喜ちやんや何かと一緒に、遊びに出たんだもの、お晝頃でなくちやア、歸ッこ有りませんやね。」

「爾かな。何うだい、彼嬉しがッて居たらう、新衣を着せて遣ッたら。」

「あ、大變に嬉しがッてましたよ。でもねえ、可愛いぢやアありませんか、何にも事情を知らないから、阿爺さんは鹽梅が悪くッて、坊と一緒にやア往かれないから、一人で遊びに往ッてお出で、と爾云ッて聞せたらね、心

假病

配さうな顔をして、「阿爺さんは何處が悪いの。」と頻りに尋ねるぢやア有りませんか。來年からは這麼ことの無いやうに、稼いでね、一緒に連れて出られるやうに爲てお呉んなさいよ。」

「それアお前、云はれる迄もねえ、己だッてお前、小瀧酒した服装でも爲てよ、近所や長屋の者の手前もあらアな、親子三人揃ッて、恵方詣や初卯にでも押出してえの。ア山々だが、去年は那の通りの失敗續きで、此ん通りの始末だから、何にも知らねえ餓鬼に迄、餘計な心配をさすかと思やア……濟まねえ、阿鶴！……。」
俯向いて鬚面に涙含んでゐる。

假病

「春早々、もう那樣こたアお云ひで無い。本年は一生懸命、二人で稼いで、少しはお錢も貯めて、來年のお正月には、樂に過されるやうにさへ爲れア、其れで可いぢやア無いか。」
「それも爾さな。だが、坊が可哀さうでならねえよ。」
「其れでもお前、私とお前さんの曠着を預けていも何でも、彼には人並にして、遊びに出されたから、私ア奈何に心地が快いか知れやア爲ない。」

(一下)

革羽織に絹双子の表着、下着は何やら能くは見えぬが、

假病

贅澤らしい品物、黒八の襟の敷を揃へて裕に着なし、八反の三尺をぎうと絞って片端折、胸の隙から盲縞の腹掛を微見せ、同じ股引に爪頭の反た麻裏を突掛け、大手を振つて吉藏が家の格子戸ガラリ、

『イヨウ、お芽出度う！』

と叫つたのは、年頃五十餘の、大柄な肥肉の藥罐頭の棟梁である。

『ハイ、入らッしやいました。』

と障子を開けて阿鶴は半身を現し、へたりと膝を突き、

『マア親方！』

忸怩して、頓に挨拶の言葉も出ず、逃込みたさうな様子

假病

で、狼狽して居る。

『阿鶴さん、何うしたえ。馬鹿に良いお正月で、結構ぢやアねえか。吉は何うしたい。宅に居るかい。』

『ハイ、何ですか、持病か起きたとか申すんで、元日から寐たツきりで御座いますの。だもんですから、親方の方へは外様とも違ひ、是非御年始に上げなけれア、ならないんですけれども、實に何うもね……サア先ア、鳥渡お上がんなすツて下さいまし。』

『爾かい。其奴ア宜けねえ。又何ぢやアねえか、飲過ぎぢやアねえのか。』

眉を擦めて棟梁は腰に挿さんだ手拭で足袋の塵を拂ひ、

『御免よ。』とづつと上ツた。阿鶴は狭いながらも、親方を正座に就かせ、

『新年はお芽出度う御座います。舊冬は良人を始め、家内中色々お世話様に相成りまして、實に有難う存じます。今年も相變りませす、何分宜しくお引立下さいますやう、お願い申しますで御座います。』
形式の如くの口上あつて、

『此方からこそ、第一番に上がります筈を、却て親方さんが態々入らしつ下さると云ふは、……實にマア、何たる勿體ない事だ御座いませう。面目次第も御座いません。』
阿鶴は奈何にも恥入つた様子。

『マア爾氣を揉みなさんな。病氣ぢやアお前、出て歩かれねえの。無理はねえ。己等は向の伊勢屋さん迄来た序だから、寄つて見たのさ。一體鹽梅が悪いてえの。何處が何う爲たてんだ。』
病氣の様子を聞いてる所へ、吉藏の忤太坊が、紙爲を片手に持つて、

『阿母！餠餅が尙出来ねえのかい。』
と入つて来た。瓦斯八丈の綿衣に、同じ羽織、リボン附唐天の大黒帽、總て兩親が苦心の新調に成つたのだ。

『太坊や、サア槍物町の親方が来て居らっしゃるから、帽と襟巻を取つて、端然とお辭儀をお爲なさい。新年は

假病

お芽出度う御座いますッてね。母の指圖通りに、太坊は棟梁の前にお辭儀を爲たのである。

「オ、剛氣だ、剛氣だ、立派にお辭儀が出来たんだな、お前は中々伶俐者だ。ウム好い着物を拵えて貰ったな。何うだい、嬉しいらう。此の子は能く物が分らア、お前達は末にやア樂が出来らア。何でも悪い餓鬼を持ッちやア、人間はおあいだい。」
太坊は棟梁に若干かの小遣を貰ッて、嬉し喜んで表へ躍んで往ッて了ッた。
棟梁は吉藏の寐てゐる枕頭へ寄ッて、

假病

「吉や、お前飛だ災難だったな。些とア快いかい。」
吉藏は體裁悪さうに、もぢく爲ながら、蒲團の上へ起上ガッて、膝を折り、
「親方、實に相濟みません。實に何うも、面目次第もねえ譯なんでげすがね。何うも、足が變に突張アガッて、お負に熱が出る、腹が痛む、と來てるもんですからね。いの一に親方の所へは年頭の御挨拶に上がらなくツちやア、成らねんでげすけども……、此通りの始末でね、エッへ……。」
頭を掻いて、恥かしさうに俯向いた。
「何うだいお前、些と我慢をして、起られるなら起きね

假病

えか、己等と其所まで鳥渡同伴つて呉れめえか。春早々寐てるなんざア、餘り様子の宜いもんぢやアねえ。」

「へエー!」といよく頭を撫て恐縮る。

「へえぢやアねえ。先ア鳥渡立ッて見な。お前の病氣の直る傳授なんかア、己はチャンと心得てらア。北村の一杯も奢らうぢやねえか。何うだい、それでも起られねえのか。」

「イーエ起られねえ事もねえんでげすが、實はその少々……、熱の方はもう収まりましたが、足が突張ますんでね。」

「伸を奢らうぢやアねえか。それなら宜からう。」

假病

「イエ、それにも及びません。北村位の所なら、何うか斯うか、往かれやせう。」

女房は假病露見を恐れて、心配さうな顔で、頻りに亭主へ眼下電光の合圖をしたのである。棟梁は子供の服装と夫婦の様子、家の内の趣とを胸の底に照し合せて、獨領き、阿鶴を傍所へ呼び寄せ、吉藏の脈を己が取って見ると、此の位の調合で直りさうだ、と窃と五圓札一枚を握らせ、早く曠着を受けて呉るやうに、と出して遣った。

阿鶴は裏口から程なく風呂敷包を抱へて戻ッて来て、理由も話さず、良人の寢所へ持込んで、

「サア、これと着換へて、親方のお供をお爲よ。」

「エッ！それア何だい？」

怪訝な顔をしたが、着せられて合點ゆき、親方の情に深く感じて、思はず落涙したのである。火鉢の前で支度を待つてゐる棟梁は此方向いて、

「吉！お前どうだい。往かれさうかい。餘り悪けア遠慮にやア及ばねえせ。己等一人でもいゝせ。」

「何う仕りました、サア斯うなれア、もう占た。天竺までもお供を爲やさア。」

「オヤ、可厭に元氣が附いたな。何も病氣で起られねえ者なら、義理で交際はなくツても可さそうなもんだ。跡で怨まれると困らア、止ちやア何うだい。」

「親方、情ないことを云ツちやア、可けません。此の場になつて止せなんぞは、罪ですせ。」

「アツハ……正直も此の位だと頼もしいな。サア吉や奢るせとなると、熱が収まつて、脚氣全快なんぞア、些驚かアな。」

「エへ、、、、此方も少々驚きましたね。」

「今日はお前、病人だから、酔ツても例の側困らせの臺灣踊は封じて置くせ。」

「オヤ、それを封じられるなんざア、心細うごわすな。」

「昔人が集まつてる時分だ、サア往かうせ。」

「ぢやア、お供を致しやせう。」
格子を開けて肩で風切る意勢の好さ！二人の後姿を見送る女房は手を合はせて、親方の姿を拜んだのである。

名倉山終

名倉山 著作者 後藤寅之助

發行者 和田 静子
東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷者 野村 宗十郎
東京市京橋區築地三丁目十一番地

發行者 春 陽 堂
東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷所 株式會社東京築地活版製造所
東京市京橋區築地二丁目十七番地

明治十四年四月廿七日印刷
明治十四年四月二十七日發行

(實價七拾錢)

後藤宙外氏著

月に立つ影
前篇 後篇

▲河村清雄氏意匠▼
 甘くして苦く澁くして味あり恰も之れ清風來る所玉露茶を啜るの妙あるは宙外氏の文なり豊熟せる葡萄の美菓に更に爽快なる華果の趣味を加へたるは宙外氏の筆なり、茲に其文の妙と筆の巧とを以てし、圓滿なる家庭に植ゑし植ゑたる花の乙女の清き心と、耿介不羈にして半世を社會に拗ねたる奇骨兒とか徑路を描き、やがて美しくして温き戀に及ぶ、眞に之れ金聲玉振、宙外氏が近年の傑作となす、

▲緒崎英朋氏口繪▼

後藤宙外氏著書目録

小説	小説	小説	小説	小説	小説
月	めぐる	かげろふ	腐肉	新機	志ら
に立つ影	泡	集	團	軸	露
後前					

著氏外宙藤後

説小陽炎集

諸書伯合
實價七拾錢郵稅六錢

本編は宙外氏が得意の作、長短十種を蒐めたるもの、倭婉美人の病めるが如きもの「かけらふあり、悲壯胡笳を聞くに似たるもの「實筋奴」あり、濃麗を極めたるは「無相宿」にして、清淡なるは「口のとがしなり、其他「ひたごころ」「身ひとつ」「紫陽花」「芍薬塚」「誰が罪」「亂れこころ」等何れも人情の機微を穿ち世態の妙味を描破し、讀者をして三歎せしむ。

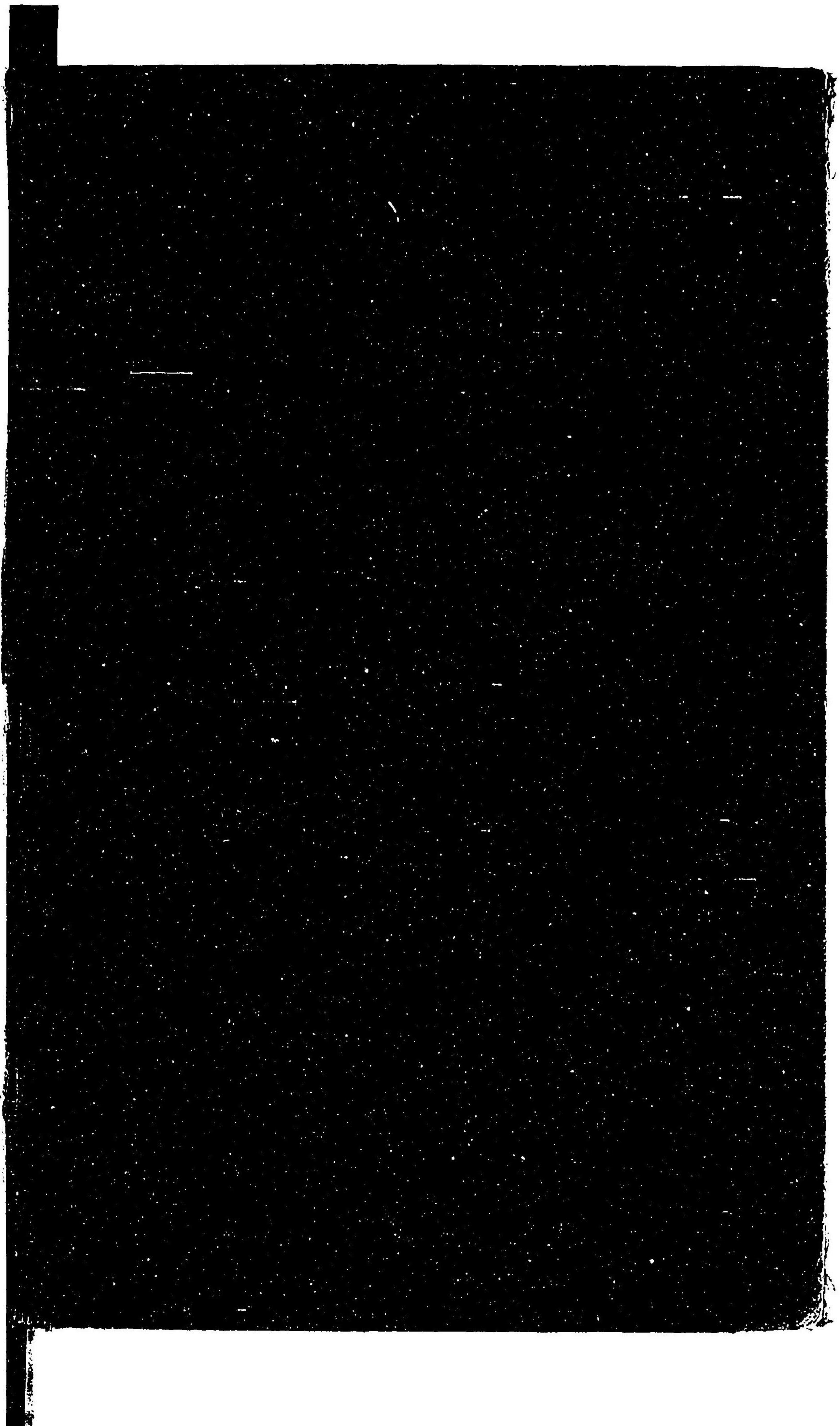
説小めぐる泡

武内桂舟氏
實價六拾錢郵稅八錢

佳人あり和佐子と云ふ、所夫を失うて千行の紅淚尙乾かざるに、他の強ふる所となりて、失戀の才子幹雄といふに再婚す。彼れは死別の新愁を抱て來たり、是れは生別の遠恨を蔵して迎ふ、琴瑟和せず春風起らず、家庭の光景荒涼を極む、端なく一愛兒と意外の動機とを得て枯木花を生ずるも須臾にして冤神の咒詛に因りて破鏡の歎を見る、而して此大恨事は不思議にして、人情の秘論を開く讀者をして思はず「河波の瀧つ世態の曲折を悉くし、人情の秘論を開く讀者をして思はず「河波の瀧つ早瀬にめぐる泡の消ゆる待つ間も定めなの世や」の感に泣かしむ。

32

388





094751-000-4

32-355

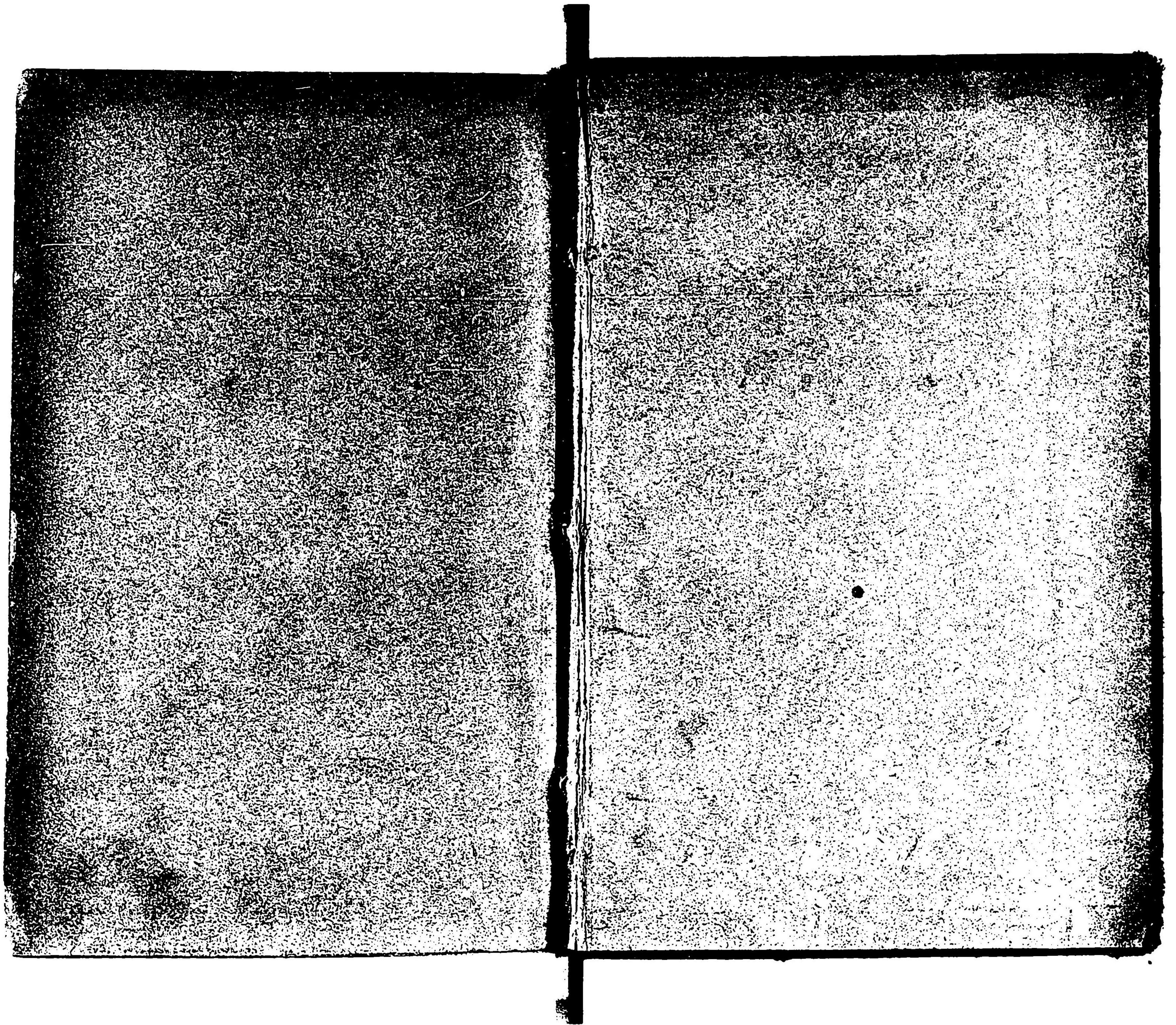
名倉山

後藤 宙外/著

M4 1

DBQ-2322





32-355

